



GGJ
Go GLOBAL JAPAN
KYORIN
UNIVERSITY

文部科学省 補助事業 GGJ (Go Global Japan)

「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」

平成27年度事業成果報告書



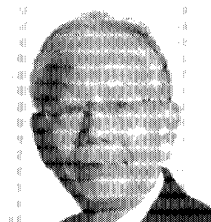
KYORIN

杏林大学

目 次

学長あいさつ	P2
「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業の概要	P3
1. 平成27年度 GGJ 事業取組み及び成果概要	P5
2. 卓抜した語学力 《日中英トライリンガル》 の養成	P9
3. スマートでタフな交渉能力の養成	P12
4. 学生の留学先となる協定校開拓・交流事業の拡大	P15
5. 平成27年度の海外交流の展開	P20
6. 学生の海外留学・研修の促進及び支援体制	P24
7. 学生・教職員のグローバル力育成	P30
8. 大学のグローバル化、教育の質保証の推進体制の確立	P37
9. 事業の経過・成果等の対外広報の展開	P42
10. キャンパス移転とグローバル化の促進	P43
11. 平成28年度事業計画	P44
12. 平成27年度事業に対する第三者評価報告書	P46

学長あいさつ



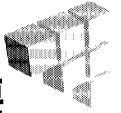
学長 跡見 裕

杏林大学では、教育理念として「優れた人格を持ち、人のために尽くすことのできる国際的な人材を育成すること」を掲げ、国際協力に貢献できる人材の育成に努めております。平成24年度にスタートした本事業は4年を経過し、グローバル人材育成の取組みは補助対象の外国語学部のみならず、杏林大学全体に着実に拡大・波及しています。

また今年の4月、外国語学部をはじめとする3学部、2研究科(大学院)を八王子から「井の頭キャンパス」に移転し、医学部や医学研究科等を含むすべての教育研究施設を三鷹市に集結させることができました。井の頭キャンパスには本事業の中心となる国際交流センター、交流プラザ、語学(中国語・英語)サロン、アクティブラーニング教室、同時通訳演習室などを集約して配置し、外国語学部の学生のみならず、全学部の学生がそれらの施設の利用・活用が可能となりました。

平成27年度は、本学が取り組んでいるグローバル人材育成事業で掲げている「卓抜した語学力(日中英トライリンガル)」を継続して強化するとともに、「スマートでタフな交渉能力」について、ルーブリックを用いて可視化することで、学生自身が身に付けるべき素養を明確に意識付けするとともに、4年間をとおしてどのように成長したかを可視化・検証する取組みが実用化されました。

補助期間の最終年度となる平成28年度は、本事業で新たに開拓した海外協定校への学生の留学派遣を促進するとともに、事業目標の達成に努めてまいります。また、補助期間終了後も引き続き大学のグローバル化、学生をグローバル人材として育成すべく取り組んでいく所存です。



「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業の概要

取組学部：外国語学部(942人) 英語学科・中国語学科・観光交流文化学科



【構想の目的・育成するグローバル人材像】

21世紀の日本社会は、これまでも増して様々な分野でのグローバル化が進行し、国際的人材の必要性がより高まっている。また世界の諸地域、特に経済発展の著しいアジアの中で日本の国際競争力の向上は喫緊の課題である。

今後、日本が進める国際協力は国際競争と表裏一体であり、海外の国々と共に成長・発展するパートナーとして対等の関係性を構築することが重要である。

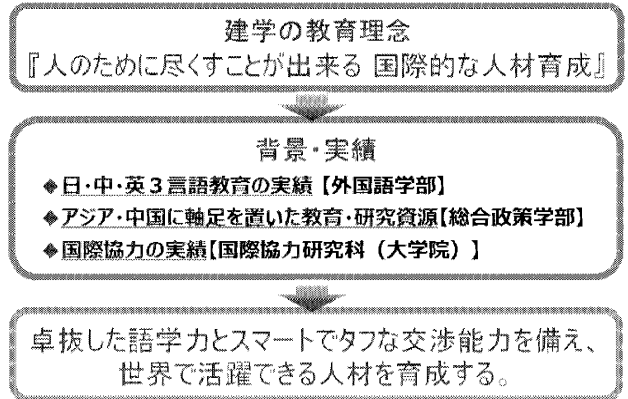
国際協力・国際競争においては、日本人としてアイデンティティを維持しつつも広い視野を持った国際人としての感覚を持つこと、すなわち自らの文化と同等に異文化の尊厳を尊重する姿勢が肝要である。この対等の関係性と誠意・熱意により醸成される永続的な信頼関係は、個人と個人の信頼関係、国と国との絆の構築に寄与する。さらに共に成長・発展する対等のパートナーとしての信頼と競争的關係は、理想的な国際協力へと発展し日本が尊敬される豊かな国とする礎となることが期待される。

【構想の概要】

外国語学部は、共通言語としての英語に加え、中国語教育に重点をおいてきた。中国語と英語をツールとすることは、アジアでのビジネス展開や交渉の場で活躍する第一歩であり、ひいては全世界への飛躍につながる。

本事業は、「卓抜した語学力」と「スマートでタフな交渉能力」を兼ね備えたグローバル人材を養成することを目指す。外国語学部の語学教育をさらに強化するとともに、アジア・中国に軸足を置いた学際的な教育資源を持つ総合政策学部と連携し、最終的には学内外への成果の波及を図るものである。

構想の概要



(1)卓抜した語学力の養成……………

「卓抜した語学力」とは「責任ある仕事を遂行できるレベルの語学力」を意味します。独自に開発した実践的語学教育プログラム(CIC、PEP等)を少人数クラスで実施することに加え、ネイティブスピーカーと目標言語のみでコミュニケーションをする「中国語サロン」「英語サロン」の常設、中国の名門大学から来ている留学生との積極的な交流、e-ラーニング、BBC・CNN・中国国営テレビ等の常時放映・視聴、同時通訳システムの積極的活用などを通して、より実践的な語学力の習得を目指す。

グローバル人材育成方法(1)

《卓抜した語学力》

・独自開発のプログラム(CIC・PEP)を5名程度の少人数クラスで実施。

CIC : Chinese for International Communication

PEP : Practical English Program



- ・「中国語サロン」「英語サロン」の常設
- ・キャンパス内の中国語・英語エリア拡大
- ・協定校からの外国人教員招聘



(2) スマートでタフな交渉能力の涵養……………

「スマートでタフな交渉能力」とは「自他の文化と教養に精通し、文化的慣習をわきまえ、対等に交渉することで創造的な結論を導き出せる能力」を意味する。「国際関係論」「アジア政治論」等の総合政策学部開講科目の履修に加え、PBL形式のディベートシミュレーションである「ケーススタディ演習」を通して、一般的な語学検定試験のスコアには表れにくい「問題発見力」「問題解決力」「自己表現力」を養成する。留学等の「プログラム修了プレゼンテーション」や「卒業研究報告会」を中国語あるいは英語で行い、母語話者との質疑応答能力を外部評価委員が判定することで学習成果の評価を行う。

(3) 海外留学、研修の推進……………

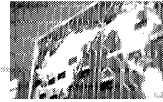
「卓抜した語学力」や「スマートでタフな交渉能力」を兼ね備えたグローバル人材を育成するために、海外留学は極めて重要な位置を占める。本学では、独自の奨学金制度や授業料等減免制度による経済的支援のほか、専門の教職員による留学前・留学中・留学後のきめ細かな指導・支援を行っており、留学を通して、グローバル人材として具備すべき知識・能力を修得できるようなシステム「主体的な留学プログラム(Active Studying Abroad Program: ASAP)」により、学士課程終了まで一貫したサポート体制を整備し、学生の海外留学・研修の推進をしていく。

グローバル人材育成方法(2)

《スマートでタフな交渉能力》

総合政策学部開講科目の積極的な履修を推進

「国際関係論」「国際経営学」「アジア政治論」「アジア経済論」等



ケーススタディ演習 PBL形式のディベートシミュレーション



- ・「中国語で学ぶ」専門科目開講
- ・産学・高大院連携シンポジウムの開催
- ・国内外でのインターンシップ・ボランティア活動の積極的奨励

学習成果の確認

《卓抜した語学力》 - 検定試験を活用 -

	中国語学科 日本語長編訳プログラム	英語学科 観光交流文化学科
中国語	<ul style="list-style-type: none"> ・HSK5級以上 (中国一流大学入学レベル) ・中国語検定2級以上 ・通訳案内士(中国語) 	<ul style="list-style-type: none"> ・HSK2級以上 (日常会話レベル) ・中国語検定4級以上
英語	<ul style="list-style-type: none"> ・TOEIC500点以上 ・TOEFL iBT52点以上 ・IELTS4.5点以上 	<ul style="list-style-type: none"> ・TOEIC800点以上 ・TOEFL iBT80点以上 ・IELTS6点以上

《スマートでタフな交渉能力》 - 外部委員による客観的評価 -

プログラム修了プレゼンテーション

中国語あるいは英語でプレゼンテーションを行い、学習成果を評価

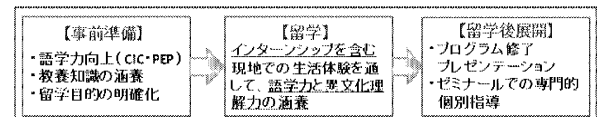
卒業研究報告会

中国語あるいは英語で発表し、母語話者との質疑応答能力を評価

「主体的な留学プログラム」と留学支援体制

「主体的な留学プログラム」Active Studying Abroad Program

留学を軸に、語学能力向上に加え、グローバル人材として具備すべき知識・能力を修得できるようなスキーム



海外留学の積極的支援(現在の海外協定校は32校、今後5年で50校まで拡大予定)

1. 交換留学では留学先の学納金免除
2. 派遣留学では本学学納金8割減免
3. 海外研修・留学奨学金制度の継続的な拡充
4. 留学先で取得した単位を卒業要件単位に認定
5. キャリアサポートセンターを中心とする留学中・帰国後の就職活動支援





1. 平成27年度GGJ事業取組み及び成果概要



(1) 各観点における課題等……………

①教育課程の国際通用性の向上

- ・教育課程の国際通用性向上のための取り組みとして、 Semester制導入により「興味関心・能力に合わせた積上型学習」、「海外留学・研修の機会拡大」が実現している。
- ・平成25年度から導入されたGPAによる成績評価制度により「単位認定の質保証」「学修指導(アカデミックアドバイス)への活用」「交換留学相互受入基準の明確化」がより一層実現された。また、平成24年度に導入したコース・ナンバリング制を精査し、グローバル人材育成のための体系的カリキュラム整備を実施することで教育課程のさらなる国際化を進めている。
- ・戦略的な国内外への教育情報の発信として、本事業特設サイト(中・英語版・スマートフォン版を含む)や英字新聞「Kyorin Times」等で、本事業の最新情報や成果報告を遅滞なく更新・発信し、国内外に向けた広報・成果の波及を図った。また、平成28年度の各学部のカリキュラム改正に合わせ、カリキュラムの多言語化(改訂版)も進めている。
- ・教育課程の運営を支援する事務組織のグローバル化のため、グローバル専門事務職員を継続雇用し、事業推進の加速化を図った。またグローバルSD「職員が拓く大学の未来～グローバル社会に支持され続ける大学を目指して～」(全職員対象)を開催し、大学職員の果たすべき役割について認識を深めた。今後も継続してSDを実施し、全職員のグローバル意識を高めていく必要がある。

②グローバル人材として求められる能力の育成

- ・「スマートでタフな交渉能力」について、本事業の構想調書をもとにその定義を明確にした。また、日本のグローバル企業5社との懇談

で、求められる「グローバル素養」について意見を聴取し、育成すべき「グローバル人材像」の確認を行った。この定義をもとにグローバルルーブリックを構築し、その評価測定を行っている。学生はグローバルルーブリックの入力作業をとおして、自身が身に付けるべきグローバル素養を確認するとともに、ルーブリック評価を毎年実施することで、その評価値の経年推移グラフにより、成長過程を確認できるようになった。

- ・「スマートでタフな交渉能力」を涵養する場として設置したアクティブラーニング教室で、PBL(課題設定・解決型学習)や少人数クラスによるアクティブラーニングを実施した。総合政策学部と外国語学部との連携によるPBL型の「ケーススタディ演習」は、このアクティブラーニング教室で実施され、「専門が異なる複数の教員による講義」と「学生・留学生中心のディベート」を展開した。
- ・海外留学から戻った学生による「プログラム修了プレゼンテーション(留学帰国者報告会)」や「卒業研究報告会」を開催した。学生は学習言語(中国語または英語等)によるプレゼンテーションを行って、語学力に加えてプレゼンテーション能力や母語話者による質疑応答に粘り強く説明し切る交渉能力等の上達度を測定した。特に前者は外部評価者や留学生、専門が異なる教員からの質疑応答を通して、スマートでタフなディスカッションができることを確認する機会となっている。

③語学力を向上させるための入学時から卒業時までの一体的な取組

- ・本学が目指す「日中英トライリンガル」育成のため、ネイティブスピーカーの教員や外国人留学生が学生と外国語で会話する「中国語サロン」、「英語サロン」を運営している。その利川

者は外国語学部生にとどまらず、他学部からの参加者も増加してきている。

- ・中国語及び英語のe-learningによる語学学習は、インターネット接続環境にいる限り、時間や空間の制約を受けることなく語学学習を実施できるメリットがある。平成27年度も、正課授業(CICやPEP、実用英語演習等)と連動させることを強化し、継続的に学習言語に触れる習慣を醸成することで学習効果を高めた。
- ・外国語によるコミュニケーション力を高めるための「中国語サロン」、「英語サロン」、各種イベントや学生のグループ学習の場として提供されている「交流プラザ」では、常時CCTV、BBC、CNNのニュース番組を放映し、キャンパスに居ながらにして海外にいるような外国語漬けの環境を提供している。
- ・海外留学から戻った学生による「プログラム修了プレゼンテーション(留学帰国者報告会)」や卒業研究報告会では、学生は学習言語(中国語または英語等)によるプレゼンテーションを行っている。これらのイベントでは学生が身に付けた外国語力だけでなく、総合的なコミュニケーション能力を確認する機会となっている。
- ・入試における中等教育段階までの外国語力・留学経験等の適切な評価について、課題のやり取りを通じ学習成果を評価する「AO入試」、語学検定試験の資格やスコアを利用する「資格取得者制推薦入試」、留学経験・在外経験を評価する「帰国子女入試」等で、中等教育段階までの外国語力・留学経験等の積極的な評価を行っている。

④教員のグローバル教育力の向上

- ・教育体制のグローバル化推進のため、海外協定校から教員を招聘し教育開発を継続実施したほか、昨年度に引き続き、オーストラリアクイーンズランド大学のCLIL(Content and Language Integrated Learning: 専門科目・言語統合型学習)プログラムに教員を派遣した。グローバル人材育成に資するより一層の授業改善を行う上で、重要なFD活動の一つとなっている。これらの活動を通じ、各学部で行う外国語による教養・専門科目の授業が徐々に増加している。
 - ・グローバル教育力向上のための取組として、昨年引き続き中国および英語圏の協定校から複数の教員を招聘し、本学教員と授業研究・共同授業等を実施した。また中国の大学との合意により、学生相互による「合同ゼミナール合宿」の実施に向けた調整を行った。
- #### ⑤日本人学生の留学を促進するための環境整備
- ・学生の留学を動機付ける取組として、留学経験者の成果を学内に周知させる試みを実施した。海外留学・研修を経験した全学部の学生が一堂に会し報告会を開催(年2回)し、学習言語(中国語・英語等)でプレゼンテーションした。また留学フェアでは留学ガイドブック『Study Abroad』の作成・配布、留学経験者がピアサポーターとして留学未経験者をサポートするなど、学修・留学への動機付けを高める取り組みを行った。
 - ・留学報告会、留学フェアなどのイベントのほか、各留学プログラム毎の留学ガイダンスを実施した。また、留学中から帰国後にわたるサポート体制として、「留学支援ポートフォリオ」システムにより、出発前から留学中、帰国後にわたり学生の状況把握をするとともに、危機管理を含めたサポートを実施した。なお、大学独自の留学向け奨学金および学納金減免制度も継続実施している。また、留学中の学習成果による単位認定や帰国後の履修指導も行い、半年・1年間留学した学生も4年間で卒業できるよう指導を行っている。さらに海外留学中の学生に対し、学内で開講している「キャリア指導」の授業を、インターネットを通して配信し、海外の留学先で授業を視聴することで、帰国後スムーズに就職活動に入れるよう配慮している。
 - ・本補助事業(タイプB)の対象は外国語学部であ

るが、他学部においても新たな海外研修プログラムが創出され、海外留学・研修に出かける学生は全学的に増加してきており、本事業の全学波及が確認されている。

(2) 特記すべき成果等……………

- ・平成28年度は本学外国語学部と中国の協定大学が連携し、学生相互による「合同ゼミナール」を実施する。これは共通課題をテーマとしたPBL形式で行うもので、両大学の学生が事前にインターネットによる意見交換等を行った後、実際に相互の大学を訪問してプレゼンテーションやディベートを行う予定である。9月10日には「グローバルシンポジウム」として、両大学の学生が取り組んできた成果を、他大学を含む外部にも公表することとしている。
- ・全学的に海外留学・研修に参加する機運が高まり、医学部では平成25年度以降毎年12～25人以上の学生が海外の大学病院でのクリニカル・クラークシップ(病院実習)に参加、保健学部では従来の全学科対象の海外研修に加え、各学科(看護学科、理学療法学科、作業療法学科、診療放射線技術学科など)に特化した海外研修が創出され、各プログラムに10名前後の学生が参加している。
- ・第6回杏林大学グローバルシンポジウム(10月17日開催)は、留学から帰国した4学部の学生の学修成果を検証すると同時に、今後留学を目指す学生がより高い意識で準備に励めるよう、留学成果を発表するというテーマで実施した。各学生は、留学中の学習言語(中国語、英語等)でプレゼンテーションを行い、審査を務めた第三者(外部)評価委員からは「学部の違いにより、海外留学・研修の目的や学生の得るところも様々であるところが興味深かった。留学を通して学生が大きく成長している様子が伺える。今後もこのような会を開催して後輩が先輩の話聞く機会を続けて欲しい。」と高い評価を得た。

・杏林大学が育成を目指す「グローバル人材像」について定義を明確にし、それに基づき構築したグローバルルーブリックは、学生のグローバル資質の測定と成長過程を可視化するものとして実用化された。また、この取り組みは他大学等を対象としたセミナーでも事例報告し、ノウハウの共有を行った。今後はAACU(全米大学協会)のValue Rubricのような、オールジャパンでの全大学共通のルーブリックが設けられれば良いのではないかと考えている。

(3) 中間評価における特記事項(留意事項、参考意見)への対応状況……………

《留意事項》「スマートでタフな交渉能力をもつ学生」の定義を今一度明確にした上で、その測定の在り方等も含め、他大学の範になるようなモデルを構築することが必要である。

【対応】本事業の構想調書をもとにその定義を明確にした。また、日本のグローバル企業5社との懇談で、求められる「グローバル素養」について意見を聴取し、育成すべき「グローバル人材像」の確認を行った。この定義をもとにグローバルルーブリックを構築し、その評価測定を行っている。学生はグローバルルーブリックの入力作業をとおして、自身が身に付けるべきグローバル素養を確認するとともに、ルーブリック評価を毎年実施することで、その評価値の経年推移グラフにより、成長過程を確認できるようになった。この取り組みは他大学等を対象としたセミナーでも事例報告し、ノウハウの共有を行った。

《留意事項》設定した卒業時の外国語力スタンダードを満たす学生数について数値目標を下回っているが、今後は当然ながら数値目標の達成を目指すとともに、外国語力の向上において様々な施策を展開している貴学においては、更に意欲的な目標を目指し取り組んでいくことが必要である。

【対応】学生の外国語力スタンダードの目標を達成するため、語学教育プログラム改善(テキスト開

発、e-learning活用による学修時間のシームレス化等)、語学検定試験(HSK、中国語検定、TOEIC、IELTS等)による語学力可視化に加え、長期休暇中には中国語学内研修・英語合宿・TOEIC合宿等を実施した。中間評価時点(平成25年度実績)では、目標10人に対し6人と下回ってしまったが、平成26年度は目標15人に対し25人が達成し目標値を上回った。平成27年度は外国語力スタンダード達成目標30人に対し26人と目標値を下回ったが、TOEIC-IPのスコアが目標値800点以上に対し、700～799点の学生が12人おり、これらのレベルの学生のスコアを800点台まで引き上げることが課題となっている。なお、平成28年度は目標40人を上回る50人の達成を目指す。

《参考意見》アクティブラーニング教室を利用したPBL型のケーススタディ演習等、これからの大学教育を先導する主体的な学びに関する取組について、それ自体をケーススタディとして記録し、公表するほか、セミナーやワークショップの形で他大学にも公開することを期待する。

【対応】「スマートでタフな交渉能力」を涵養する場として開設された最新鋭のアクティブラーニング教室では、PBL(課題設定・解決型学習)や少人数クラスによるアクティブラーニングを実施した。総合政策学部と外国語学部との連携によるPBL型の「ケーススタディ演習」は、このアクティブラーニング教室で実施され、「専門が異なる複数の教員による講義」と「学生・留学生中心のディベート」が展開された。

(4) その他.....

・平成28年4月に、八王子キャンパスにあった外国語学部をはじめとする3学部・2研究科を「井の頭キャンパス」(三鷹市)に移転し、三鷹キャンパスの医学部・医学研究科と合せ、全学(4学部・3研究科)が三鷹市に集結した。これにより全学のグローバル化が加速されることが期待されている。実際に医学部の学生が英語サロンに通うなど、本事業の取組が着実

に全学に波及している。

- ・GGJの補助期間が平成28年度をもって終了することから、補助期間終了後のグローバル人材育成事業の継続・推進のため、全学の「グローバルポリシー」を策定した。
- ・総合政策学部では平成28年度入学者からGlobal Career Program(GCP)がスタートした。GCPでは英語力強化に加え専門科目の英語による授業の実施、2年次後期から半年以上の海外留学を推奨し、外国語学部へ続く「グローバル人材プログラム」が始動している。
- ・平成28年3月に上海(中国)の高校3校を訪問して交流を行った。上海市甘泉外国語中学、仙霞高級中学校(現地名の中学校は、中等教育学校の意)及び上海外国語大学附属外国語学校は、いずれも日本語教育にも熱心に取り組んでいる学校で、英語教育を含む教育レベルの高さを見聞することができた。これらの学校とは情報交換・人材交換をはじめとする交流に着手し、優秀な留学生確保に繋げていきたい。



2. 卓抜した語学力《日中英トライリンガル》の養成



「卓抜した語学力」とは「責任ある仕事を遂行できるレベルの語学力」を意味する。独自に開発した実践的語学教育プログラム(CIC: Chinese for International Communication、PEP: Practical English Program 等)を少人数クラスで実施することに加え、ネイティブスピーカーと修得を目標とする言語のみでコミュニケーションをする「中国語サロン」「英語サロン」の常設、中国の名門大学から来ている留学生との積極的な交流、e-ラーニング、BBC・CNN・中国国営テレビ等の常時放映・視聴、同時通訳システムの積極的活用などを通して、より実践的な語学力の習得を目指した。

(1) 中国語教育の取組み概要……………

中国語の教育システムは、中国語学科の1年次300時間集中プログラム(月～金曜日の毎日1コマで週5～6コマと補講)と他の2学科(現状は英語学科と観光交流文化学科)向けの2年間(学科によっては1年半)の統一プログラム(CIC)を実施している。教科書の統一と、非常勤教員を含めてのチームティーチング、統一テストなどで成果を上げてきた。

中国語学科においては、基礎力養成の後に、2年次に現地への留学を推奨し、帰国後の3年次からより高いレベルの指導に移るシステムを確立しており、留学帰国後の学生ならびに中国からのハイレベルな留学生(中学高校から日本語専攻で、中国の語学系大学でも日本語学科の特別上級クラスに在るといったレベルの学生たちが協定校から来学している)と同じクラスで、CALLシステムや同時通訳システムを駆使した授業が行われている。

(2) 英語教育の取組概要……………

外国語学部の英語教育は、本学学生の特性に合わせて改良を積み重ねてきたPEPが中心である。

1年次には、音声教育を中心に発音・イントネーションを徹底してトレーニングするとともに、自然な英語をできるだけ多く暗唱することで多様な英語表現を内在化させるよう設計されている。これにより、英語を使い楽しむことを体感しながら、4年間の英語学習の素地を整えることに成功している。

2年次には、新たに独自開発した教材(PEP#2)を活用し、1年次のspeaking・listening中心教育にwriting・reading教育を融合させる試みを開始した。この教材は、本事業特任教員(英語母語話者)が制作したもので、2年次後期に推奨している海外留学の準備に資するよう、本学で学ぶ留学生へのインタビューをもとにした「異文化理解」をテーマとしている。これにより、外国語学部学生のニーズに合致した英語教育プログラムが整備され、留学前により実践的な語学教育が展開できることとなった。

さらに、長期休暇中には、学修成果の確認とさらなる語学力向上を目指し、「中国語学内研修」(8月4日・5日、9月14日)、「英語合宿」(8月5日～7日)、「TOEIC合宿」(8月6日～8日)、IELTS対策講座(計6回)を実施し、1、2年次の学生を中心に延べ137人が参加した。いずれも短期集中型のトレーニングメニューが用意されており、研修・合宿後には、語学検定試験において各自の(その時点での)目標をクリアできる者が多く、卓抜した語学力を身につける重要な機会として十分な成果を出している。

(3) 外国語力を身につけるための環境整備及び取組み……………

①中国語サロン、英語サロンは、ネイティブスピーカーの特任教員や留学生が常駐しており、全学の学生・教職員に開放されている。

外国語学部の学生はもとより他学部の学生にも広く利用され、日常的に母語以外の言語でコミュニケーションをとる機会を提供している。平成27年度には、外国語学部の一部授業科目と語学サロンを関連づける試みが開始されたことにより、より一層活発に利用されるようになった。

②e-learningによる語学学習は、インターネット接続環境にいる限り、時間や空間の制約を受けることなく語学学習を実施できるメリットがある。平成27年度も、正課授業(たとえば、CICやPEP、実用英語演習等)と連動させることを強化し、継続的に学修言語に触れる習慣を醸成することで学習効果を高めた。また、他学部生及び教職員にも利用機会を提供しており、全学的な語学学習ツールとなっている。

③学内で海外TVニュース番組(中国語・英語)を常時放映することにより、学修言語に触れる機会を確保し、キャンパスのグローバル環境の維持を図った。主として学生食堂や講義棟出入口に設置されていることから、自ら意識的にアクセスしなくても、ごく身近で、しかも自然な形で学修言語に接することができるという意味で、留学に近い環境を提供している。

④同時通訳演習室は、本事業により設備・備品を整備され、教育環境が充実した。現状では、中国語の通訳演習や、音声同時吹き替えスタイルでのスピーチ発表や演劇発表に多く利用されている。今後は英語など他言語での利用拡大を図る必要がある。

⑤本補助事業の支援により、学修成果を測定する各種語学検定試験の受験料が減免されている。これまで、TOEIC IP試験は7月と1月に1・2・3年次のみ受験を必須(4年生は希望者のみ)として実施してきたが、平成27年度からは外国語学部全学生に受験を求めることとし

た。これは、スコアという形で、学生自身が学修成果を可視化できるだけでなく、卓抜した語学力を養成する教材や教授法の開発・改良にデータを活用できるメリットもあるからである。

(4) 語学力養成の成果分析等(語学検定結果、プレゼンテーション)……………

「卓抜した語学力」を測定する指標として、語学検定試験(中国語検定、HSK、TOEIC、IELTS等)を活用することになっている。定期的に受験をすることにより、自身の語学力ならびに学修成果を可視化できるだけでなく、語学クラス分けやアカデミックアドバイスの資料としても活用されている。

平成26年度に卒業した学生210名のうち、英語・中国語の二言語において本事業で設定した各学科の目標を達成した学生は16名(構想調書に記載した平成26年度の目標数は15名)で、前年度(6名)から飛躍的に増加した。平成27年度卒業生は、各学科の目標を達成した学生数は25名にまで増加したことから、本補助事業で実施した取り組みは着実に成果を挙げているといえる。しかしながら、目標クリアまであと一步の学生(たとえばTOEIC790点など)が多く、平成27年度の目標数(30名)には及ばなかったことは残念であった。対象を外国語学部所属の全学生に拡大すると、平成27年度に本事業で設置した目標値をクリアしたのは63名、平成28年度中に目標値クリアが見込まれる位置にいる学生は46名となっている。これは、少人数語学授業や中国語・英語サロン、e-learning等により着実な成果を挙げていることの証左であると思われる。

また、外国語学部坂本ゼミナール3年生6人が「全国大学マーケティングコンテスト関東予選」(11月29日)に出場したほか、同3年生3名が「第4回全国学生英語プレゼンテーションコンテスト」の1次予選を通過した。2次予選(11月28日)では「地方創

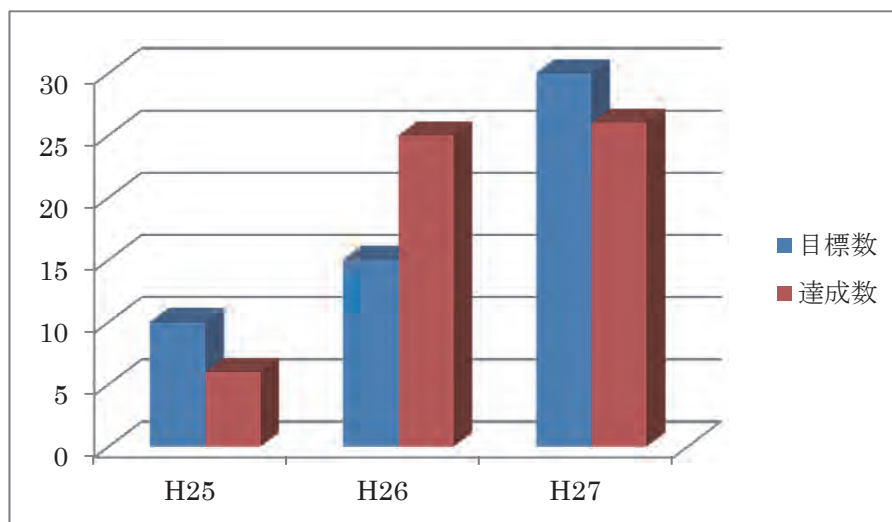
生につながる海外企業の誘致を提案！」をテーマにプレゼンテーションを行った。

さらに「基礎演習課題発表会」(1月9日)「留学帰国者報告会(プログラム修了プレゼンテーション)」(7月11日、1月9日)「卒業研究報告会」(2月2日)を開催するなど、学修言語を用いたプレゼ

ンテーションを通して、問題発見力・問題解決力・自己表現力を磨く機会が多く設定した。

さらに、同時通訳システムの使用としては、ゼミナール主導で、中国語演劇を学園祭でのプログラムとして毎年実施している。

図 1. 外国語カスタンダード達成者の推移



3. スマートでタフな交渉能力の養成

(1) 「スマートでタフな交渉能力」の定義……………

本学が育成を目指している「スマートでタフな交渉能力」をもち、将来広く世界で活躍する「グローバル人材」の定義を確認した。それは以下の5項目に集約される。

- ①卓抜した語学力：日中英トライリンガル
 - ・ 英語 (TOEICスコア、他の検定はTOEICに換算)
 - ・ 中国語 (中国語検定、HSK、通訳案内士)
- ②知識・理解、汎用的技能 (学士基礎力)：GPAの値／文章読解力・文章作成力、定量的スキル／情報リテラシー／学習の統合と応用力／生涯学び続けるための知識と姿勢／社会適応性
- ③コミュニケーション能力 (スマートな交渉能力)：相手の意見をよく聞き理解することができる／相手の立場、意見・考えを尊重した上で自分の意見を分かりやすく述べることができる／過不足なく明快 (論理的) に議論を展開することができる／情報を発信する力／相手に働きかける力／説得する力
- ④異文化理解とグローバル的視野 (スマートな知性)：日本の歴史、文化、習慣、社会情勢に関する知識と理解／日本の良さを認識し、それを外国人にも伝えることができる／相手国の歴史、文化、習慣、社会情勢に関する知識と理解／相手国と日本の違いや共通点を認識している／国際情勢、国際政治など時事問題に関する知識と理解
- ⑤リーダーシップ・コンピテンシー (タフな交渉能力)：チームワーク (規律性、リーダーシップ、自己の役割の自覚)／全体の意見を調整し最適化を図る能力がある／好奇心と問題発見力・状況把握能力と問題解決力がある／創造的思考、企画・提案力がある／ビジョンをもち、長期的に何事にも真正面から取り

組む力がある／自身のストレスをコントロールすることができる

この定義を基に人材育成教育を展開するとともに、その素養を測定・評価する方法としてグローバルルーブリックを開発し運用している。ルーブリックによる評価方法は、各項目について学生の自己評価に学生同士の相互評価、教員による他者評価を加味して評価を行う。各項目は、スマートでタフな交渉能力の定義を織り交ぜて設定されていることから、ルーブリック記入を通して、学生たちは「スマートでタフな交渉能力とは何か」をより具体的かつ詳細に把握できるようになっている。

(2) アクティブラーニング教室を活用した「スマートでタフな交渉能力」の育成……………

「スマートでタフな交渉能力」を涵養する場として開設された最新鋭のアクティブラーニング教室は、学生や教職員の評価が高く、高い教室稼働実績を上げている。「ゼミナール」、「基礎演習-2」、「国際コミュニケーション1・2」、「日本語学演習-1・2」、「日本語教育実習」、「学際演習」等の授業が行われ、PBL (課題設定・解決型学習)や少人数クラスによるアクティブラーニングを実施した。総合政策学部と外国語学部との連携によるPBL型の「ケーススタディ演習」は、このアクティブラーニング教室で実施され、「専門が異なる複数の教員による講義」と「学生・留学生中心のディベート」が展開された。たとえば、利害の対立する外交や経営の問題に多角的にアプローチし、問題解決の突破口を見つけ、ディベートのシミュレーションを通して議論の難しさやおもしろさを体感し、双方が納得できる交渉の基本スキルを身に付けることを目指している。

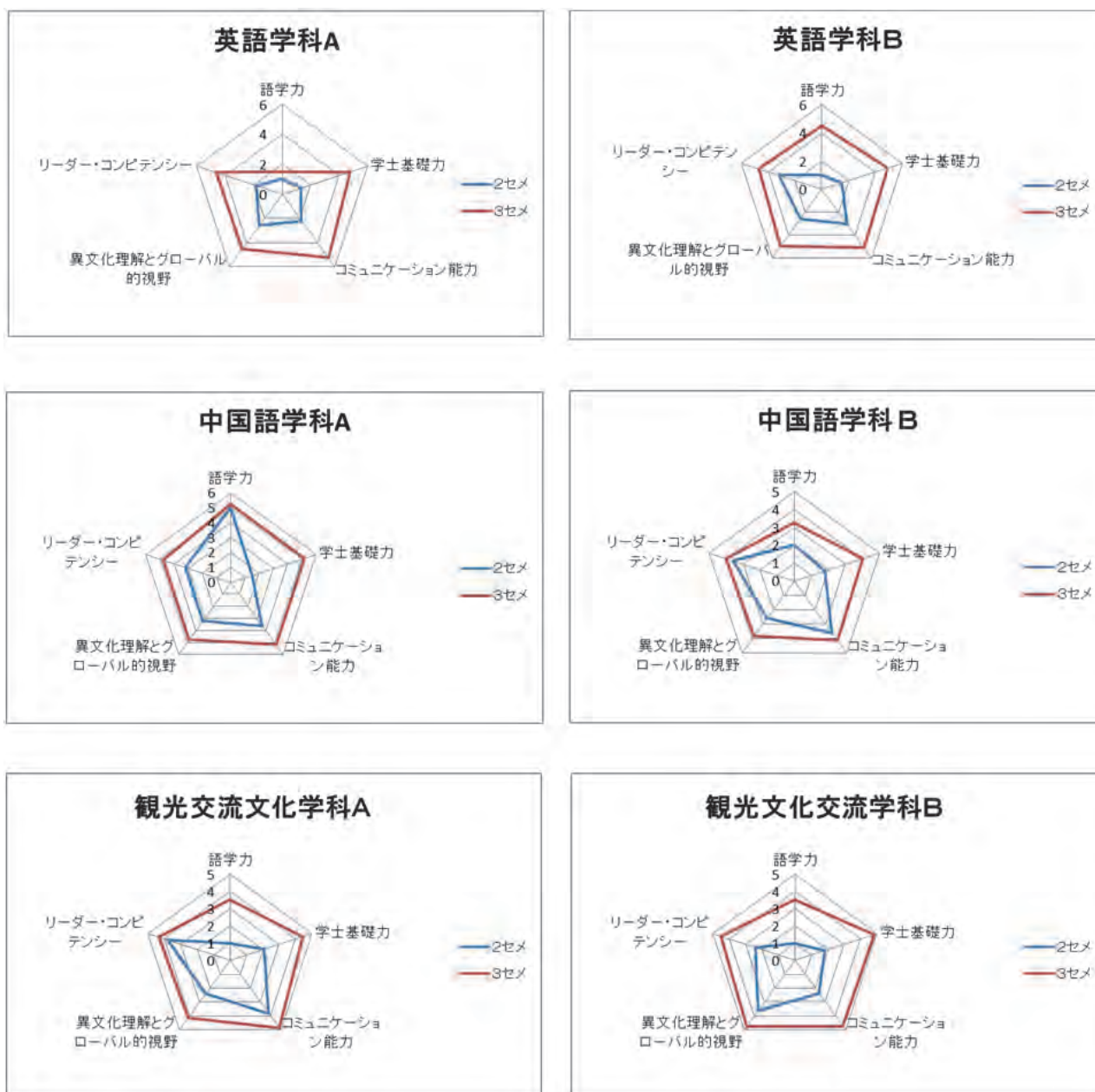
また、第三次中期計画の教育開発部会と連動し、PBL (課題設定・解決型学習)や少人数クラスによるアクティブラーニングの実施をさらに積極

的に展開し、点検・改善も実施した。

さらに、各分野で活躍しているグローバルリーダーを招聘した「グローバルセミナー」開催や、外国語学部必修科目「コミュニケーション概論-1・-2」に医学部・保健学部・総合政策学部の教員が登場し、分子細胞生物学(医学部)、病態生化学(保健学部)、行動経済学(総合政策学部)の講義が展開さ

れた。自らの興味関心と講義内容の関連性を見出すことで、学修の新しい切り口を得ることができると、学生からはおおむね好評を博している。語学学習のみならず学際的な教養を涵養する必要性を十分に認識する機会となった。なお、平成27年度も、他学科・他学部履修を推奨し、「卓抜した語学力」を活かす「スマートでタフな交渉能力」の素

図2. 平成26年度及び27年度にルーブリック評価を行った学生の例示



地を身につける機会を積極的に創出した。

(3) ルーブリックによる「スマートでタフな交渉能力」の測定・可視化……………

平成25年度には「スマートでタフな交渉能力」を測定するためのチェックシート(ルーブリック)が作られ、「プログラム修了プレゼンテーション」や「卒業研究報告会」で活用されている。また、平成26年度からは、杏林大学がめざすグローバル人材像を明確にし、その素養を学年ごとに可視化することにより、学生のグローバル人材としての成長プロセス、海外留学による成果なども合わせて可視化する方法が構築され、運用されている。「スマートでタフな交渉能力」を評価測定・可視化するためのルーブリックでは、学生は自己が身に付けるべき素養を明確に意識づけするとともに、4年間を通してどのように成長したかを可視化できるようになった。

ルーブリックによるグローバル素養の評価測定(自己評価に相互評価を加える)は、大学在学中の8セメスター(4年間)の中で1、3、5、7セメスターの4回実施する。1セメスターは入学時、3セメスターは海外留学前、5セメスターは留学終了(帰国)後、7セメスターは卒業前である。入学から卒業までに評価・測定を4回実施し、これをレーダーチャートやヒストグラムで比較することにより、個々の学生の成長を可視化・確認できるようになっている。

(4) プログラム修了プレゼンテーション(留学帰国者報告会)と卒業研究報告会……………

平成27年度もプログラム修了プレゼンテーション(留学帰国者報告会、7月11日、1月9日)と卒業研究報告会(2月2日)を開催した。前者は、外部評価者や専門が異なる教員からの質疑応答を通して、スマートでタフなディスカッションができることを確認する機会となっている。参加学生は、

十分に時間をかけて準備し、かつ学修言語のみでのやり取りをしなければならないため苦労は大きいものの、やり遂げた充実感とその学修を推進させる原動力となっているようであり、母語話者による質疑応答に耐え粘り強く説明し切る交渉能力等の上達度を測定することができた(外国語学部単独では7月11日、1月9日の年2回、全学規模での開催は10月17日)。外部評価委員(第1回：中国外交部・張智浩氏、テキサスA&M大学Waugh Yuki氏、第2回：中国外交部・張智浩氏、チチェスターカレッジJuliette Ryan氏)からは「話すことによって語学力を継続し、伸ばすことができるため、これからも積極的に言語を使う機会を探してほしい」等のコメントをいただいた。

後者は、大学での学びを完結させる毎年恒例のイベントで、学修言語でのプレゼンテーションを推奨しているが、日中英トライリンガルを育成するという観点から、部分的に母語を使用してのプレゼンテーションも可としている。卒業論文で取り扱った研究テーマについてプレゼンテーション・質疑応答を行い、学士課程4年間の学修成果を報告した。

(5) インターンシップ、ボランティアの推進……………

本学では、語学研修や文化体験を含むボランティアやインターンシップの機会を創出し、学生の参加を推奨している。

平成27年度にインターンシップに参加した学生数は44名で、そのうちグローバル企業においては6社7名であった。また、海外における日本語教育インターンシップに2名が参加した。平成27年度にボランティアに参加した学生数は延べ376名(うち外国学部75名)、うち、身に付けた外国語力を用いたボランティアは69名(うち外国語学部41名)、海外ボランティアは10名(いずれも外国語学部)であった。



4. 学生の留学先となる協定校開拓・交流事業の拡大

(1) 新たな協定校の開拓……………

平成27年度時点でニライ大学(マレーシア)、北京大学医学部(中国)、ウィッテンバーグ大学(アメリカ)の新規海外協定校3校が増え、15か国・地域の52大学・機関と学術交流協定を締結し、平成28年度までの目標であった海外協定校数50校を達成することができた。また、今年度はこれまでになかったマレーシアにも新たな協定校を開拓できたことは、多言語国家の利点を最大限利用し、本学が目指す英語、中国語の同時習得も可能な環境にあり、学生の留学先としても幅を広げることができた。

協定校が増えたことで本事業の目的である「日中英トライリンガル人材育成」のための中国圏及び英語圏の留学先が確保されて交換留学、中長期留学、 Semester など留学の種類も増え、学生のニーズに応えることができる留学プランを提供することができるようになった。

(2) 平成27年度の交流活動……………

平成27年度は3組の教職員を海外に派遣し、協議を行った大学、高校などの教育機関等は、既に協定を締結している機関も含め29ヶ所となった。大学とは学生交流(留学・受入)を中心としたプログラム、教員の交流などについて意見交換を行い、お互いの協力体制について確認をした。なかでも、上海外国語大学とは、来年度、本学の英語学科、中国語学科のゼミナール学生と上海外国語大学日本文化経済学院の学生が相互に大学を訪問し、ゼミナール交流・シンポジウムを合同開催す

ることで話しをまとめることができたことは大きな成果であり、来年度の開催に向け、学生の指導を早速始動している。高校とも本学への留学の可能性について意見交換をすることができ、今後検討を進めていく予定である。

(3) 新規海外協定校での新規プログラムの始動…

本事業の開始以降、新たな留学プログラムの始動としては、本事業後に協定締結したポートランド州立大学(アメリカ)、南オーストラリア大学(オーストラリア)、サンシャインコースト大学(オーストラリア)とは中長期留学派遣の募集を行い、南オーストラリア大学には1名、サンシャインコースト大学には2名の学生を派遣した。そのほか、既に協定校である大連外国語大学には協定後始めて交換留学生を派遣することができた。

次年度以降の新規のプログラム施行に向けた検討を進めており、引き続き有為な留学プログラムを構築し、学生の派遣を行っていく。

(4) 全学的な海外留学・研修の促進……………

全学的に海外留学・研修に参加する機運が高まり、医学部では平成25年度以降毎年12~25人以上の学生が海外の大学病院での臨床・クラークシップ(病院実習)に参加、保健学部では従来の全学科対象の海外研修に加え、各学科(看護学科、理学療法学科、作業療法学科、診療放射線技術学科など)に特化した海外研修が創出され、各プログラムに10名前後の学生が参加している。

表 1. 学術交流協定大学一覧 (平成 28 年 3 月現在)

No.	(国/地域) 協定大学名
1	(香港)香港中文大学
2	(オーストラリア)ウーロンゴン大学 英語センター
3	(イギリス)イーストアングリア大学
4	(韓国)乙支大学校
5	(中国)河北大学
6	(台湾)国立政治大学
7	(ベトナム)ハノイ国立大学 社会科学人文科学大学
8	(韓国)高麗大学校
9	(台湾)南台科技大学
10	(タイ)マヒドン大学
11	(韓国)建陽大学校
12	(韓国)韓瑞大学校
13	(中国)天津外国語大学
14	(台湾)大仁科技大学
15	(アフリカ)ケニア中央医学研究所
16	(中国)ハルビン医科大学
17	(シンガポール)シャーテックシンガポール 国際ソーリズムカレッジ
18	(中国)北京第二外国語学院
19	(中国)杭州師範大学
20	(中国)浙江工業大学
21	(中国)北京外国語大学
22	(中国)北京語言大学
23	(中国)大連外国語大学
24	(中国)上海外国語大学
25	(中国)広東外語外貿大学
26	(ニュージーランド) Ara Institute of Canterbury (旧クライストチャーチ・ポリテクニク工科大学)

No.	(国/地域) 協定大学名
27	(韓国)国立公州大学校
28	(中国)東華大学
29	(フランス)オーベルニュ大学 (クレルモン第 1 大学)
30	(オーストラリア)ディーキン大学
31	(中国)大連大学
32	(中国)北京大学外国語学院
33	(タイ)チェンマイラチャバット大学
34	(イギリス)チチェスターカレッジ
35	(台湾)国立高雄餐旅大学
36	(イギリス)レスター大学
37	(アイルランド)リムリック大学
38	(オーストラリア)アデレード大学
39	(アメリカ)ノーザンアリゾナ大学
40	(オーストラリア)サンシャインコースト大学 *H27 年度新規留学プログラム実施
41	(アメリカ)ルイスアンドクラークカレッジ
42	(イギリス)ブライトン大学
43	(アメリカ)ポートランド州立大学 *H27 年度新規留学プログラム実施
44	(アメリカ)オレゴン州立大学
45	(オーストラリア)南オーストラリア大学 *H27 年度新規留学プログラム実施
46	(台湾)台湾環球科技大学
47	(タイ)コンケン大学
48	(中国)華東師範大学
49	(中国)天津理工大学
50	(マレーシア)ニライ大学 *H27 年度新規協定校
51	(中国)北京大学医学部 *H27 年度新規協定校
52	(アメリカ)ウィッテンバーグ大学 *H27 年度新規協定校

訪問先	NAFSA Annual Conference (Boston)
訪問者	Paul Snowden 副学長 国際交流課 川尻明香 主任

目 的

NAFSA 年次大会は年に 1 度開催され、国際教育や留学に関連する会議や研修などを行う世界各国から教育機関が集まる会である。グローバル人材育成推進事業の一環として、JAFSA を通じて Study in Japan エリアへの大学ブース出展を行い、協定校との情報交換や、NAFSA に参加している各国の大学関係者と打合せを行う。

行 程

5 月 25 日(月)

NAFSA 会場にて Study in Japan エリア各大学ブース設営/日本出展団体オリエンテーション/Study in Japan エリア全体設営。

5 月 26 日(火)

NAFSA 年次総会参加(ブース対応)/各大学と打合せ・意見交換 (University of Newcastle, STA トラベル, 英検協会, Universidad Autonoma de Sato Domingo, Samara State Aerospace University, Portland State University, Lewis & Clark College, University of Limerick, Ryerson University, University of Western Sydney, University of Toronto, University of Limerick)/Study Abroad Foundation 関係者と派遣留学プログラムについて情報交換。

5 月 27 日(水)

NAFSA 年次総会参加(ブース対応)/各大学と打合せ・意見交換 (Wittenberg University, Bangor University, Christchurch Polytechnic Institute of Technology, 国立政治大学, MacEwan University)。

5 月 28 日(木)

NAFSA 年次総会参加/文科省および慶応義塾大学、関西学院大学による日本におけるスーパーグローバルおよびグローバル人材育成に関するプログラムを紹介するセッションに参加/ブース対応/各大学と打合せ・意見交換(State University of New York at Stony Brook, University of Leicester)。

5 月 29 日(金)

各国大学と打合せ・意見交換 (University of East Anglia, 北京語言大学)/ブース撤収。

総 括

世界各国の大学関係者が一同に会す場はなかなか無く、協定校関係者等に直接会うことができるのは大変貴重なことである。

昨年の NAFSA を機に協定に発展した複数の大学関係者とも再会し、今後の本学学生派遣について話し合った。また、連絡が停滞してしまった大学や、手続きについて確認が必要な大学のスタッフと会うこともできた。新たな協定を持ち掛けられた大学もあったが、現在すでに目標である 50 大学を超える協定を達成している為、新たな協定は見合わせているとの回答を行った。海外の大学関係者だけでなく、国内の他大学関係者との協議や情報交換ができ、大変実りの多い出張となった。

今回打合せを行った大学とは、本学のグローバル人材育成推進事業への取り組み、キャンパス移転、外国語学部生 2 年次の 1 学期留学という将来的なアカデミックプランなどについて改めて話し合うことができた。海外の大学における学部課程への受入れ条件となる英語力が高いこともあり、本学の学生の多くは語学学習からのスタートとなる可能性が高いと感じる。今回の NAFSA で情報交換を行った大学との具体的なプログラムや協定に向けた協議を継続し、また、今後は留学生受入れに向けた準備も進めていく事が重要である。

訪問先	California State Polytechnic University
訪問者	外国語学部 高木 眞佐子 教授

目 的

今後本学の学生を派遣する留学プログラムを実施する可能性のある California State Polytechnic University (アメリカ) を訪問し、大学の施設・設備や留学時の生活環境等の視察および留学プログラムについて大学関係者との打合せを行う。

行 程

8 月 13 日(木)

CPELI (Cal Poly English Language Institute) Director の Daniel Lecho 氏によるロサンゼルス市街の案内、Cal Poly へ研修に来る学生たちを連れていく場所の紹介および打合せ。

8 月 14 日(金)

College of the Extended University の Global Education Programs のプレゼンテーション/アジア地域の大学との提携プログラムに関する説明/本学との提携についてディスカッション/施設見学。

8 月 16 日(日)

CPELI の Vice Director, Tammy Johnson のガイダンス/CPELI のティーチング等についての説明を受ける。

総 括

今回、Cal Poly からの度重なる誘いを受けて、Cal Poly Pomona の愛称で知られる California Polytechnic State University を表敬訪問ができたことは、杏林大学のアメリカでの今後のパートナーシップ強化にとり有益な一歩であったと考えている。

当大学の附属機関である語学学校 CPELI は、アジア地域でのパートナーシップ強化を目指して日本、韓国、中国、台湾などで積極的な誘致活動を行っている。今回の訪問で、Cal Poly の College of the Extended University and International Center は、日本では大阪大、創価大、東京女子大、関西外大、明治大他、多数の地方大学とも提携を結び、長期・短期で様々なプログラムを展開している現状を知った。

主に 1 日目から 2 日目にかけては、海外からの受入れの現状を、国際交流課のスタッフが丁寧に説明してくれた。また、新しい試みとして、来年早々には中国からキャビンアテンダントの卵を招いて、2 週間程度の英語とホスピタリティの研修を行うことになっているという話もあった。彼らにとっても初めての試みだということである。

3 日目は、観光ホスピタリティ学部を自ら案内してくれた。もともと農学部からスタートした Cal Poly ではあるが、Disneyland や Universal Studio などのあるロサンゼルス郊外という絶好のロケーションに位置していることから、近年では観光産業に優れた人材を輩出していると評判にもなっている。施設見学を終えた後、Chesser 博士からは、東洋大学のホスピタリティプログラム(14 日程度の短期の研修)についての紹介があった。学生たちは CPELI の英語と、併設ホテルや学内の設備を使ったインターンシップの両方を行いながら、キャンパス内のホテルに宿泊、英語とホスピタリティを学ぶという内容になっている。当然のように、ディズニーランドへの一日観光や、超一流の西洋風ホテルのおもてなしを体験するコースというのも組み込まれていた。英語と観光産業両方の「良いとこどり」した内容になっている。

3 日間の充実した訪問で、Cal Poly には様々なプログラムがあることが分かったが、特記すべきことは、Cal Poly にはニーズに合わせて独自に素材を組み合わせて作る様々なプログラムが実施できる点である。英語と観光という、杏林の強みを二つも兼ね備えている点も無視できない。また、州立大学であることから当然価格も私立大学よりリーズナブルである。ロサンゼルス近郊とは言っても治安は極めて良く、勉強する環境としても申し分はない。

現在、本学では近くのアーバインにも留学生を派遣しているが、Cal Poly の知名度と英語と観光という学校の強み、カリフォルニアへの学生の人気などから考えて、当該大学との様々なレベルの提携は模索すべき価値があることである。

訪問先	上海外国語大学(虹口キャンパス、松江キャンパス)、上海外国語大学附属高校 上海对外経貿大学、上海甘泉外国語中学、仙霞高級中学校、JETRO 上海事務所 ほか
訪問者	外国語学部 宮首 弘子 准教授 総合政策学部 劉 迪 教授 国際交流課 塚本 悌三郎 調査役

目 的

今回の出張では、上海(中国)の大学・高校とのグローバル教育に関する協働を加速化するため、具体的な計画の実現に向けた協議を行う。

行 程

3 月 21 日(月)

上海外国語大学外国留学生部(虹口キャンパス)訪問、本学からの学生の留学に関することを中心に協議を行った/上海对外経貿大学国際商務外語学院(松江キャンパス)を訪問し、本学との学術交流や学生交流に関する協議を行った。

3 月 22 日(火)

上海市甘泉外国語中学を訪問し、杏林大学の紹介と甘泉外国語中学で外国語及びグローバル教育の実情について見聞した/仙霞高級中学を訪問し、杏林大学の紹介と仙霞中学で教育内容及びグローバル教育の実情について見聞した/上海市人民政府僑務弁公室副処長らと昼食会に参加/上海外国語大学日本文化経済学院(松江キャンパス)を訪問し、学生ゼミの相互交流や杏林大学への中長期学生に関する協議を行った。

3 月 23 日(水)

上海外国語大学附属中学を訪問し、杏林大学の紹介と上海外国語大学附属中学で語学教育及びグローバル教育の実情について見聞した/JETRO 上海事務所を訪問し、中国の経済事情等について話をうかがうとともに、本学学生が上海を訪問する際のレクチャについて依頼した/全日本中国人博士協会上海支部主催の杏林大学上海訪問団送別会にお招きを受けた。

総 括

1. 上海外国語大学とのゼミ交流については、杏林

大学側の提案に基づき、基本合意を得た。なお、上海外国語大学の学生が杏林大学を訪問しシンポジウム、学生交流を実施する件に関しては継続して検討することとなった。

2. 上海外国語大学及び上海对外経貿大学から杏林大学に中長期留学するニーズが確認できた。中長期の教育プログラム(半期 20 単位、1年 40 単位程度のカリキュラム)を本学開講科目の中から策定し、提示できるようにしたい。

3. 短期(サマー)プログラムに関しても、2～3週間のプログラムを早急に構築したい。

4. これからの中国が必要とする分野は、環境及び医療・介護であるとのことから、大学院国際協力研究科(特に国際協力研究科の国際開発、国際医療協力等の各専攻)に対する強い関心が確認できた。国際協力研究科の全専攻において大学院推薦入学の適用が可能なため、学生に周知することで杏林大学の大学院に進学する希望者が出てくると思われる。よって、大学院案内(中国語版)を作成し各協定大学担当者に説明する必要がある。また、協定校から杏林大学の大学院へ進学するための現地募集・選考の実施について具体的に検討すべきであると感じた。

5. 上海の高校の教育レベルの高さを実感した。杏林大学への指定校推薦等についてはすぐに実現することは難しいと思われるが、いずれにしろ中国における知名度の低さを実感したので、広報活動や交流活動の積み重ねが重要であろう。

6. 中国留学中の学生のインターンシップについては、大学及び公安による許可があれば実施可能であることを確認した。インターンシップ場所については留学先大学でも紹介できるが、できれば日本側で開拓・調整するのが望ましいとのこと。



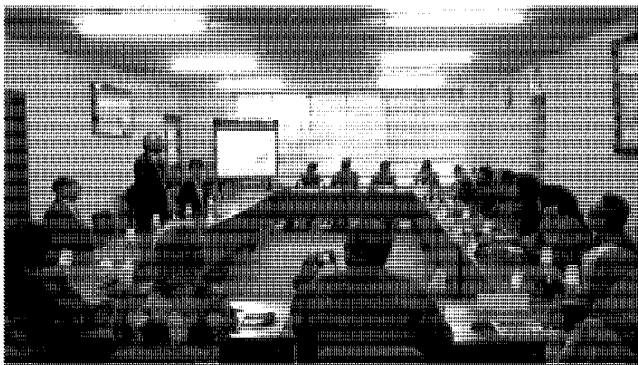
5. 平成27年度の海外交流の展開



≪5月≫

インドネシアの大学関係者が八王子キャンパスを訪問

2015年5月7日(木)にインドネシアのThe Association of Private Higher Education Institutions in Indonesia (APTISI) Region VII-EastJavaよりインドネシアにある17大学の関係者24名が本学の八王子キャンパスを訪問。初めに坂本学部長から本学におけるグローバル人材育成推進事業の取組みや新キャンパスについて紹介があり、その後の質疑応答では活発な意見交換がおこなわれた。訪問団の中には今後、教員や学生を日本に送りたいとの積極的な申し出もあり、今後の学術交流については協議を継続することとなった。



テキサスA&M大学のVickie Winston先生が八王子キャンパスを訪問

2015年5月12日(火)にテキサスA&M大学のEnglish Language Instituteの講師、Vickie D. Winston氏が本学の八王子キャンパスを訪問。本学とテキサスA&M大学の交流について意見交換が行われた他、外国語学部2年の英語クラスや英語サロン、ライティングセンターを視察し、本学学生とも英語で交流を行った。

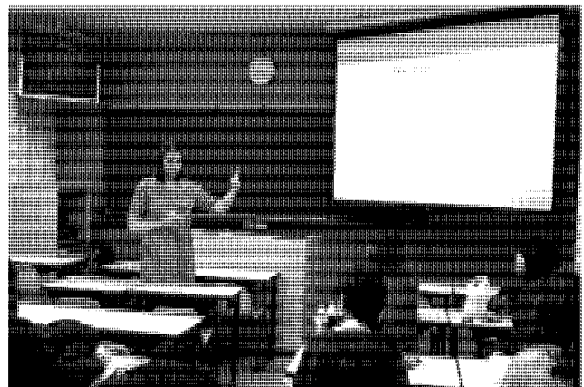
テキサスA&M大学からは、5月末に10名の学生と引率教員が来日し、八王子キャンパスで日本語プログラムを実施した他、日本語教師養成プログ

ラムとの交流授業、英語クラスや英語サロンでの英語教育インターンシップも実施した。



オックスフォードの英語学校教員による特別講義を実施

2015年5月19日(火) 1時間目と2時間目に外国語学部英語学科インテンシブクラスの学生を対象としたCIE Oxford, Irma Banyte-Kelly先生による特別講義が行われた。



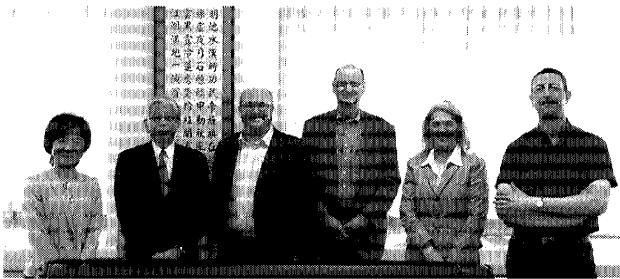
CIE Oxfordへの留学プログラムは、3年前から行われ、学生のグローバル化に大いに貢献するプログラムとなっております。オックスフォードの歴史や町についてのレクチャーやプログラムの紹介などを行い、ディスカッションを交え、内容の濃い授業となった。その後Irma先生には、留学経験学生が次々に会いに来て、久しぶりの再会を喜び合った。

《6月》

チチェスターカレッジ担当者が八王子キャンパスを訪問

2015年6月10日(水)イギリスの協定校、チチェスターカレッジよりMark Bloodworth氏が訪問。

チチェスターカレッジとは、2009年度から学生派遣の交流が始まり、今までに多くの学生が留学し、今秋11名が留学をする。跡見学長、スノードン副学長、坂本外国語学部長、黒山教授、ランバート准教授と今後の交流やキャンパス移転のことなどを和やかな雰囲気の中、歓談した。その後、留学予定の学生との顔合わせを行い、カレッジの紹介や留学生活についてのレクチャーを行った。学生は英語での説明に真剣に耳を傾け、今後の留学生活に臨むうえで良い機会となった。

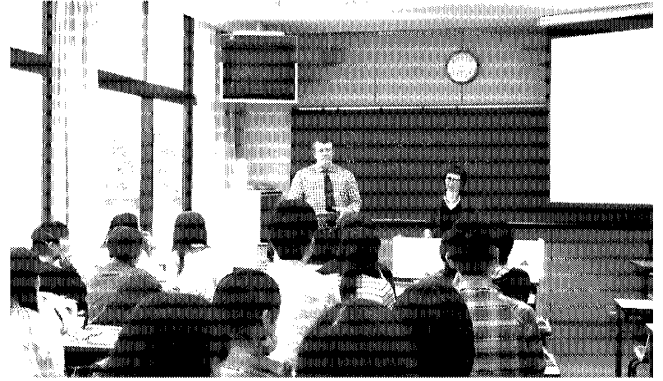


本学にVictoria University of Wellingtonの教職員が訪問し、EPPcafeを実施

6月19日(金)に、ヴィクトリア大学ウェリントン校(Victoria University of Wellington)から、Dr. Angela JoeとMr. Simon Hodgeが八王子キャンパスを訪問し、「EPP café」が実施された。「EPP café」とは、ビクトリア大学へ留学した際に実際に受講するEnglish Proficiency Program (EPP)の体験クラスの一つで、コーヒー・紅茶・クッキーを囲みながら英語学習をするカフェ形式の授業です。

今回は「日本の食べ物とニュージーランドの食べ物」を題材に、形・色・味などの特徴から食べ物を当てるクイズを、教員と学生または学生と学生で出し合いながら英語の授業を行った。このカフェはお昼休み時間と3時限目の2セッション開かれ、本学学生が合計42名参加した。ニュージーランド

で有名なMojo CoffeeやWhittakerが提供され、参加した学生は、参加型の授業に積極的に発言しながらカフェ形式のクラスを体験する良い機会となった。



コンケン大学(タイ)のKetkaew先生が本学で講義

昨年3月16日に学术交流協定を締結したタイのコンケン大学から2015年6月15日～7月14日の期間、Chavis Ketkaew先生とPhaninee Naruetharadhol先生をお迎えし、学生への講義や学内研究会での研究発表などを行った。

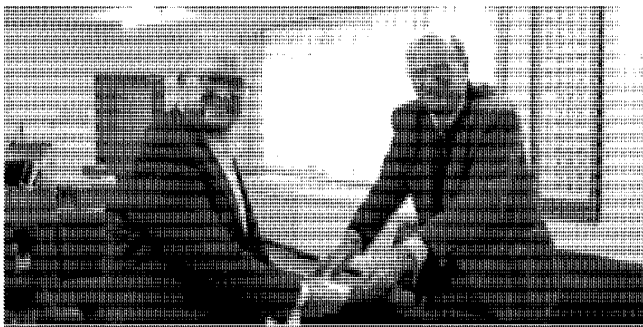
6月26日(金)に行われた総合政策学部 久野准教授の「アジア経済論」では、Ketkaew先生より、本学の学生に向けてタイの地理・気候・文化等の基本情報、およびタイの経済発展の歴史的経緯や現在の政策課題等についてご講義いただいた。本学での滞在期間中は、本学とコンケン大学との今後の学术交流および共同研究の可能性についても協議を行った。



《11月》

チチェスターカレッジの担当者が本学を訪問

11月20日(金)八王子キャンパスに協定校であるチチェスターカレッジから Mark Bloodwort氏が来訪した。現在チチェスターカレッジには11名の学生が留学しており、学生達のビデオレターを撮影し、届けてくれた。学生は皆、生き生きとしていて、有意義な留学生活を送っている様子が紹介された。



《12月》

CIE Oxford のLuke副校長先生が本学学生へ特別講義

12月3日(木)に、留学・研修の実施教育機関であるCIE (College of International Education, Oxford)から、副校長Luke Murgatroyd氏が来校し、学生へ特別講義が行われた。CIE Oxfordへは現在8名の学生が留学しており、学生のグローバル化が大いに期待できるプログラムとなっている。



英語学科1年のインテンシブクラスの合同授業にて、オックスフォードの魅力や歴史的建造物について、興味深い講義が行われた。学生たちも次年

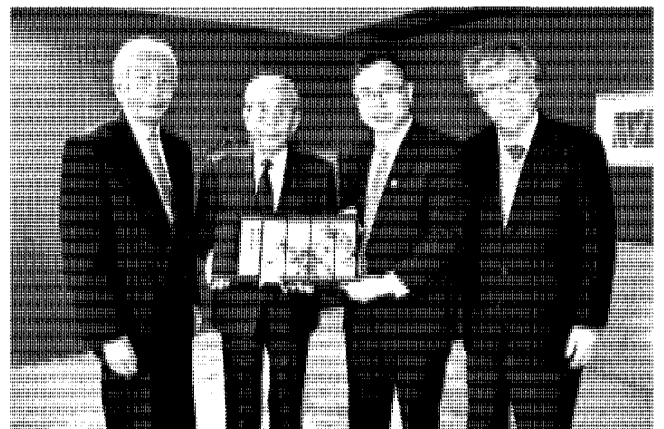
度以降の留学をイメージするよい機会となり、充実した時間を過ごすことができた。その後、2016年2月に海外研修プログラムとしてオックスフォードに渡る学生たち8名と、英語学科インテンシブクラスの学生8名を交え、オックスフォードの特徴と英語学習法について、英語で質問をしながらイギリスについて学んだ。

Luke先生からは「オックスフォードの街はいつも学びに溢れている街です。自身で抱いている夢に向けてツールとしての英語を育んでください。ここオックスフォードは必ずそれを助けてくれるでしょう。近々楽しみに待っています。」との激励の言葉をいただいた。

《2月》

広東外語外貿大学の陳教授が本学を訪問

中国・広東外語外貿大学の陳多友教授(広東外語外貿大学東方語言文化学院院長)が2月9日(火)、本学を訪問した。広東外語外貿大学は中国南部にある国家重点大学の一つで、語学教育に関して中国国内で指導的役割を果たしている。2010年11月には本学との間で通訳・翻訳に関する学術協定を締結し、その後は学生や院生の交換留学や、本学教員による出張講義が行われるなど、交流を進めている。



懇談は三鷹キャンパスの理事長室で行われ、陳教授と、本学から松田博青理事長、跡見裕学長、塚本慶一国際交流センター長との間で終始和やかな雰囲気の中で行われた。陳教授は、広東外語外貿大学の仲偉合学長からの今までの協力に対する

お礼の言葉ならびに、訪中要請の旨が伝えられた。広東外語外貿大学では、日本語は英語に次いで学習者が多くなっており、日本や日本語への関心が高まっていることが伺えた。また今後は大学院間、とりわけ通訳翻訳を始めとした各分野での教員養成や共同研究を進めたいという話も出された。両校は、引き続き交換留学や共同研究などを活発化させるために互いに努力していくことを確認した。

《3月》

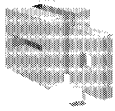
ポートランド州立大学(アメリカ)の関係者が本学を訪問

2016年3月8日(火)三鷹キャンパスに本学の協定校であるポートランド州立大学(Portland State University、以下PSU)からDr. Sona Andrews、Dr. Margaret Evertt、Dr. Stephen PercyそしてDr. Masami Nishisibaが訪問。本学からは跡見学長、スノードン副学長、坂本外国語学部学部長、三浦総合政策学部講師が出席し、今後双方の大学からの学生派遣/受入れを行うにあたり現在の両大

学の取り組みなどについて情報交換が行われた。

PSU側からは本学の学生受入れのみならず、PSUの学生を積極的に日本へ送り出したいとの申し出があった。両大学には共通する専攻のみならず、重点的に取り組んでいる事業にも共通点が多くあり、今後の両大学共同プログラム実施に向けて大変有意義な話し合いができた。両大学は、引き続き協議を重ね、具体的なプログラム実施に向けて努めていくことを確認した。





6. 学生の海外留学・研修の促進及び支援体制



在学生の海外留学の活性化を目指し、留学プログラムの一層の充実化を図ると共に、学生の動機づけの促進や、留学中のサポート、帰国後の報告会などを通して留学支援体制の強化を図った。

(1) 留学の動機づけや留学を促進するための取り組み

① 留学関係冊子の発行

留学案内誌『Study Abroad』を編集し、留学ガイダンス・個別相談時に随時配布を行い、学生へ留学の全体像を鮮明にすることができた。また、『留学ハンドブック』では、渡航準備から留学中の危機管理等の情報を総合的にまとめ、スムーズな海外生活となるようサポートすることができた。



② 留学ガイダンス・オリエンテーションの実施

ガイダンスを通して、留学の説明・動機づけを深めることができた。また、出発前指導や海外危機管理オリエンテーションを実施し、海外での生活・学業に万全の態勢で取り組める様に指導を行った。また、海外危機管理オリエンテーション(平成27年8月3日、平成28年1月23日)を開催するなど、より安全な留学を目指した支援の拡充も留学促進を後押ししている。



③ 経済的支援

学生の海外研修・留学に対し、大学独自の学費減免制度や奨学金制度に加え、国の特別政策枠(海外留学支援制度(短期派遣)奨学金)等の適応により、継続して経済支援を行い、留学促進に繋げることができた。

表2. 海外研修・留学に対する経済支援実績(平成27年度)

奨学金制度	受給者数																																															
	医学部	保健学課	総合政策学部	外国語学部	国際協力研究科	社																																										
交換留学制度 (留学先の授業料減免)	7名																																															
留学中の学費減免制度 (杏林大学への学納金80%減免)	平成27年春学期適用 20名																																															
	平成27年秋学期適用 58名																																															
杏林大学海外研修・留学奨学生 (給付額)	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>医学部</th> <th>保健学課</th> <th>総合政策学部</th> <th>外国語学部</th> <th>国際協力研究科</th> <th>社</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1年間(長期)留学・・・40万円</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>1</td> <td>4</td> <td>-</td> <td>5</td> </tr> <tr> <td>半年間(中期)留学・・・20万円</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>2</td> <td>18</td> <td>1</td> <td>21</td> </tr> <tr> <td>5～8週間海外研修・・・10万円</td> <td>1</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>3</td> <td>4</td> </tr> <tr> <td>2～4週間海外研修・・・5万円</td> <td>12</td> <td>7</td> <td>3</td> <td>9</td> <td>-</td> <td>31</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>13</td> <td>7</td> <td>6</td> <td>31</td> <td>4</td> <td>61</td> </tr> </tbody> </table>							医学部	保健学課	総合政策学部	外国語学部	国際協力研究科	社	1年間(長期)留学・・・40万円	-	-	1	4	-	5	半年間(中期)留学・・・20万円	-	-	2	18	1	21	5～8週間海外研修・・・10万円	1	-	-	-	3	4	2～4週間海外研修・・・5万円	12	7	3	9	-	31	計	13	7	6	31	4	61
	医学部	保健学課	総合政策学部	外国語学部	国際協力研究科	社																																										
1年間(長期)留学・・・40万円	-	-	1	4	-	5																																										
半年間(中期)留学・・・20万円	-	-	2	18	1	21																																										
5～8週間海外研修・・・10万円	1	-	-	-	3	4																																										
2～4週間海外研修・・・5万円	12	7	3	9	-	31																																										
計	13	7	6	31	4	61																																										
海外留学支援制度(短期派遣)奨学金 (独立行政法人日本学生支援機構)	短期研修・研究型 16名																																															

(2) サポート体制

① 留学のためのサポート

海外研修や留学先に渡航する前に、本学に設置してある語学学習システム(語学サロン・ライティングセンター等)を用い、事前学習を行った。

短期留学では引率教員が同行し、現地での生活・学業面でのサポートを行い、中長期留学では海外危機管理対策実施団体と連携し、24時間体制で電話によるフォローが可能な体制を敷いている。また、緊急連絡網の構築も行った。

② 留学成果測定の実施

ポートフォリオシステムにて留学中の報告書類をウェブ上で提出するシステムを構築し、学生がシステム上で留学の振り返りが出来るようになった。

また、本システムにてグローバル人材としての到達目標、学習達成度の測定をし、留学前後の成果測定が可能となった。

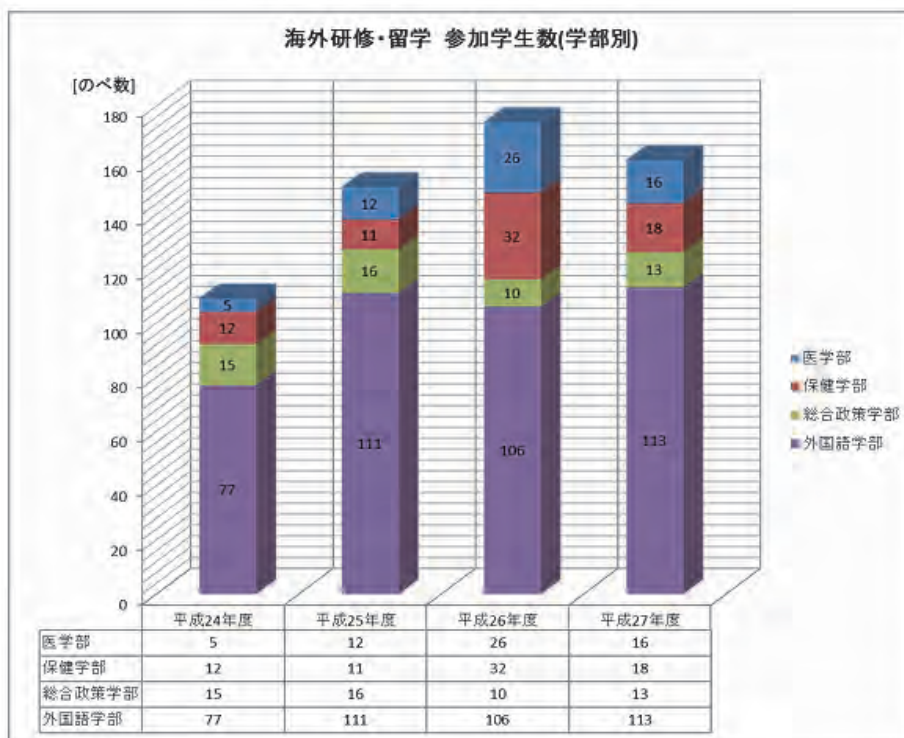
③ 授業配信による帰国後の就職活動への配慮

キャリアサポートセンター(就職支援部門)と国際交流センターが連携して、留学中の学生(特に3年次・4年次に留学中の学生)に対しては、インターネットを通じて定期的に連絡を取り、就職に関する情報提供や進路相談、エントリーシートに関するアドバイス等を行うと同時に、本学外国語学部のキャリア支援に関する授業「キャリア指導」やキャリアガイダンスのネット配信事業を実施。平成27年度は「キャリア指導」30コマの授業のうち、17コマのコンテンツを配信し、留学先での就職活動サポートを強化した。

(3) 留学・海外研修派遣実績/海外留学経験者就職実績

派遣プログラムの多様化を図り、従来の留学先に加え新たな留学先(協定校)へ学生を派遣した。

図3. 留学・海外研修派遣実績の年度推移(平成24年度～27年度)



平成27年度 留学実績

留学先	国・地域	実施日程	期間	人数	備考
ビクトリア大学	カナダ	2015.4.11~2015.7.12	3ヶ月	5	
		2015.4.11~2015.8.24	4ヶ月	1	
ウーロンゴン大学	オーストラリア	2015.4~2015.12	9ヶ月	1	
高麗大	韓国	2015.8~2016.6	11ヶ月	1	
韓瑞大	韓国	2015.8~2016.6	11ヶ月	-	
香港中文大	香港(中国)	2015.9~2016.5	8ヶ月	-	
政治大	台湾	2015.9~2016.8	12ヶ月	1	
カリフォルニア大アーバイン校	アメリカ	2015.9.29~2016.3.21	6ヶ月	10	
ポートランド州立大	アメリカ	2015.3.21~8.14	5ヶ月	-	
オックスフォードインテンシブプログラム	イギリス	2015.9.15~12.21	3ヶ月	5	
		2015.9.15~2016.2.22	5ヶ月	3	
チチェスターカレッジ	イギリス	2015.9.5~12.21	3ヶ月	2	
		2015.9.5~2016.2.15	5ヶ月	9	総1
トロント大	カナダ	2015.8.30~12.21	3ヶ月	1	
クライストチャーチポリテクニク工科大学	ニュージーランド	2015.8~2016.7	11ヶ月	1	
		2015.9.12~12.20	3ヶ月	5	
		2015.9.12~2016.2.28	5ヶ月	3	
クイーンズランド大	オーストラリア	2015.8.22~12.14	3ヶ月	1	
シアトルセントラルコミュニティカレッジ	アメリカ	2015.9~2016.3	6ヶ月	-	
ディーキン大	オーストラリア	2015.9~2016.3	5ヶ月	4	総1
サンシャインコースト大	オーストラリア	2015.9~2016.2	5ヶ月	1	
		2015.9~2016.7	10ヶ月	1	
南オーストラリア大	オーストラリア	2016.3~2016.8	5ヶ月	1	総1
北京外国語大	中国	2015.9~2016.7	11ヶ月	1	
上海外国語大	中国	2015.9~2016.1	5ヶ月	2	
		2015.9~2016.7	11ヶ月	-	
		2016.3~2016.7	5ヶ月	2	
北京第二外国語学院	中国	2016.3~2017.1	11ヶ月	1	
		2015.9~2016.1	5ヶ月	-	
		2016.3~2016.7	5ヶ月	1	総1
		2015.8~2015.12	5ヶ月	1	
広東外語外貿大	中国	2015.8~2016.6	11ヶ月	-	
		2016.2~2016.6	5ヶ月	2	
		2016.3~2017.1	11ヶ月	1	
北京語言大	中国	2016.3~2017.1	11ヶ月	-	
河北大	中国	2016.3~2017.1	11ヶ月	-	
大連外国語大	中国	2016.3~2017.1	11ヶ月	1	
チェンマイラジャバット大	タイ	2015.8~2015.12	4ヶ月	3	総3
コンケン大	タイ	2015.8~2015.12	4ヶ月	-	
Newtype International Language School(私費留学)	フィリピン	2015.8~2016.1	5ヶ月	1	総1
EF International Language School(私費留学)	アメリカ	2015.9~2016.3	6ヶ月	1	
猛世大(私費留学)	韓国	2016.3~2016.8	5ヶ月	1	
				74	

平成27年度 海外研修実績

研修名	国・地域	実施日程	期間	人数	備考
ニューカッスル大研修	オーストラリア	2015.8.22~9.13	23日間	3	外2 総1
クライストチャーチポリテクニク工科大学 日本語教育インターンシップ	ニュージーランド	2015.8.22~9.12	22日間	2	外2
マレーシアインターンシップ	マレーシア	2015.8.18~9.13	27日間	-	
南台科大研修	台湾	2015.8.29~9.12	15日間	12	※12 異文化交流センター
バンクーバー研修(保健)	カナダ	2015.8.29~9.13	16日間	-	
クイーンズランド大研修(保健)	オーストラリア	2015.8.29~9.6	9日間	9	保9
ブライトン大研修(保健)	イギリス	2014.9.4~9.20	17日間	9	保9
韓国研修	韓国	2015.9.8~9.11	4日間	-	
上海インターンシップ	中国	2015.8.16~9.5.8.23~9.5	14日間、21日間	-	
オックスフォードOIE	イギリス	2016.2.25~3.14	19日間	9	外9
ロサンゼルス研修・シトラスカレッジ	アメリカ	2016.2.28~3.14	16日間	16	外12 総4
タイ研修	タイ	2016.2.3~2.13	11日間	10	外10
St Thomas Hospital (Guy's Hospital)(医)	イギリス	2015.4.6~5.1	26日間	1	
Norshore University Evanston Hospital(医)	アメリカ	2015.4.6~5.1	26日間	6	
Stony Brook University School of Medicine(医)	アメリカ	2015.4.6~5.1	26日間	2	
Stony Brook University School of Medicine(医)	アメリカ	2015.4.6~5.1	26日間	1	同一学生
Medical University of Vienna(医)	オーストリア	2015.5.4~5.29	26日間	1	
Medical University of Vienna(医)	オーストリア	2015.5.4~5.29	26日間	1	
New York Presbyterian Hospital Columbia University Medical Center(医)	アメリカ	2015.4.6~5.1	26日間	1	
Mahidol University(医)	タイ	2015.4.1~4.30	30日間	1	同一学生
University of Crete(医)	ギリシャ	2015.5.4~5.29	26日間	1	
国立台湾大(医)	台湾	2015.4.6~5.1/5.11~6.5	26日間、26日間	1	
				86	

(4) 留学報告

北京語言大学留学体験記(中国)

外国語学部 中国語学科 松島 朋美

(2015年3月～2016年1月)

北京に留学してまず驚いたことは“北京話”という現地の人が話す方言のようなもので、北京では単語の最後にerをつけて発音します。最初はなれず、ただでさえ今まで聞いていたCDや先生のゆっくりできれいな中国語ではないのにさらに聞きなれないものが追加されて頭の中はてんでこ舞いでした。しかし時間と共に徐々に聞き取れるようになり、それが面白くなって自分でも北京人になりきって“北京話”を使うようになりました。そうすると買い物などで会話をするとき店員さんがフレンドリーになってくれて値切りやすくなることもありました。

留学前は日中関係についてニュースや新聞を見て良いとは言えないことを知っていたので、北京に来た当初は中国人に「どこから来たの?」と聞かれるたびに少しためらいがありました。実際に「私は日本政府が嫌いだ」と言われたこともあります。しかし、多くの中国人は私が日本人と知っても普通に接してくれました。日本人との大きな違いを感じたところは、一度仲良くなるととても親切で尽くしてくれること、ほとんどの学生がピュアで勉強熱心、一日を図書館だけで過ごすこともあるなど見習うべきところが沢山あると思いました。また、日本のアニメや漫画が好きで多く同じ話題も多くあり一緒に学食を食べながらお話しする時間はとても楽しかったです。


元々アクション映画が好きで、特にカンフーに興味があった私は学校の張り紙にあった中国武術



の授業に思い切って参加してみることにしました。そこで私は同じように中国武術に興味を持つ留学生と共に“長拳”を習いました。空手のようなもので最初は動作を覚えるのがやっとでした。また体の柔軟性も求められるので毎回柔軟運動でひいひい言いながらも、楽しく練習をしていました。ある時先生に武術大会への出場に誘われ、それから学校の武術チームに入れてもらい、中国人学生たちと一緒に練習をしながら中国語も勉強できる機会をいただき、それはとても幸せな時間でした。

他にも中国人に日本の伝統を知ってほしいという気持ちから、ソーラン節を始めました。きっかけは学校行事である“世界文化祭”(国際色豊かな学校の特色を活かした文化祭のようなもの)。その日本ブースを代表してステージでソーラン節を披露しました。それが好評で多くの中国人や他の国の留学生に写真を求められ、少しでも日本の伝統を知ってもらえたようでとても嬉しかったです。

北京にいた一年間はとても充実して、それによって私は大きく成長できたことを実感しています。それは語学力だけに限らず、多くの外国人と交流したことで考え方や国際的な視野を養うことができました。この経験は将来の役に立てていきたいと思っています。

 オックスフォードプログラム留学(イギリス)

外国語学部 英語学科 小磯 麻奈

(2015年9月～2015年12月)

I learnt a lot of things which I had never known about, not only English language but also about foreign cultures from this study abroad.

The programme was very helpful for me to improve my English skills, especially grammar. In the morning class, I studied grammar intensively. When I could not understand about topics or vocabularies in the text, I asked teachers immediately. Also, when I made a mistake with grammar, they pointed it out and gave me advice. Their explanations were easy to understand. However, they sometimes used a bit difficult words in the class, so I guessed what it meant and expanded new vocabularies. In the afternoon class, I studied many kinds of topics such as business, charity, drama and others using English. The most impressive topic was drama. Japanese students and I had to create everything including the plot. This was the first time I had engaged myself with making drama, so it was difficult. Also I was not good at acting, so I was really nervous when I played the role. However, it was a great opportunity for me and one of my fabulous memories while I was in Oxford. There were many people who were from various countries, and they had completely different cultures from mine. When I talked with them, I often found some differences between Japan



and their countries, and I was surprised by it, especially on food and law. I did not know about it at all, so I compared and learnt the differences.

My host family was very kind and reliable. At first, I was really worried about accommodation because this was the first time I had been overseas and lived away from my parents for such a long time. However, they always helped me and looked after me kindly when I was ill, and their meals were tasty, so I liked it very much. I want to have the meal again. Also, I celebrated their birthdays with cards, and they were very pleased by them. I am glad to have spent time with them for three months. If I could go back to Oxford, I want them to be my host family again.

On holiday, I visited many places such as London, Stonehenge, Blenheim Palace and so on. I saw fireworks at Guy Fawkes Night which was a very famous event in Oxford. I was impressed because going to London was my dream. Thanks to studying abroad, it came true. I really enjoyed these small trips with my friends.

(5) プログラム修了プレゼンテーション……………

[春学期開催]

実施日：平成27年7月11日(土) 9時30分～13時

場 所：E401教室

評価委員：中国外交部 張 智浩 氏

テキサスA&M大学 Waugh Yuki氏

発表学生：50名(アメリカ、イギリス、ニュージーランド、オーストラリア、中国、台湾、フィリピン)

(ディーキン大学2名、CIE Oxford6名、チチェスターカレッジ7名、クライストチャーチポリテクニク工科大学4名、カルフォルニア大学アーバイン校10名、オックスフォード研修7名、ロサンゼルス研修5名、北京第二外国語学院1名、北京語言大学1名、上海外国語大学2名、北京外国語大学1名、広東外語外貿大学2名、国立政治大学1名、Man to Man Boarding School 1名)

評価委員2名の先生を迎え、留学・海外研修帰国



者14件、50名の学生のプレゼンテーションを行った。パワーポイントを用い、学習内容や留学先での様々な経験を留学先で学んだ言語で発表した。

講評ではテキサスA&M大学のWaugh氏から、「留学はアドベンチャーであり、人生にとって大きな宝物となり、キャリアになっていくでしょう。」と学生にメッセージを伝えた。

[秋学期開催]

実施日：平成28年1月9日(土) 13時～15時30分

場 所：D305教室

評価委員：中国外交部 張 智浩氏

チチェスターカレッジ Juliette Ryan氏

発表学生：28名(イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、中国、台湾)

(クライストチャーチポリテクニク工科大学5名／ビクトリア大学6名、C I E,Oxford5名、チチェスターカレッジ2名、ウーロンゴン大学1名、クイーンズランド大学1名、トロント大学1名、国立政治大学1名、上海外国語大学4名、北京第二外国語学院1名、広東外語外貿大学1名)、評価委員2名の先生を迎え、留学・海外研修帰国者11件、28名の学生のプレゼンテーションを行った。パワーポイントを用い、授業報告、留学経験などを留学先で学んだ言語で発表した。



Juliette Ryan氏は講評において「英語は話すことによって語学力を継続し、伸ばすことができるため、これからも積極的に英語を使う機会を探してほしい」というメッセージを送った。本発表会は、留学成果を測る良い機会となっている。留学によって語学力のみならず、人間的に大きく成長した学生の姿が見受けられた。



7. 学生・教職員のグローバル力育成



(1) グローバルセミナー……………

学生の国際理解、国際力育成を目的としたグローバルセミナーを開催した。

第15回グローバルセミナー「タイの医療ツーリズム～介護産業を中心に～」

実施日：平成27年12月15日(火)

講演者：Roman Klimenko氏

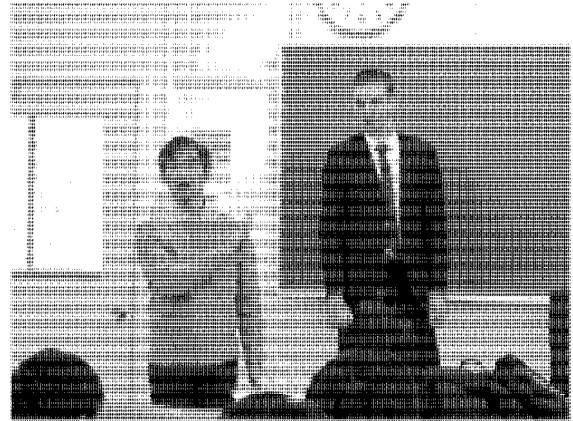
場 所：八王子キャンパス F棟252教室

参加者：学生16名、教職員10名

Klimenko氏は初めに、現在世界的に高齢化が進んでいる現状について触れ、今後2050年までに60歳以上の高齢者が現在の3倍近くまで増える見込みである事を紹介し、これを受けて高齢者サービスへの需要が世界的な規模で増え続けるとの見解を述べた。特に、福祉制度が充実している国の医療費は高額であるため、医療費がより安価で高齢者に優しい国であるタイへの高齢者受入れが増えることが見込まれるため、タイが国としてどのような政策を立てて、医療ツーリズムの受入れを行う必要があるかという可能性と課題について説明した。また、Klimenko氏が自ら行ったアンケートを基に、タイ国内の介護ケア施設における現状と課題等についても詳しくお話を聞くことができた。

今後更に増えて行く医療ツーリズムはビジネスチャンスでもあるが、受入れ国に求められる英語やその他の言語が使える看護師や介護士等の人的確保や海外からの患者のみならず、国内の患者も平等に高度な治療が受けられるような仕組み作りが求められる事を学ぶ良い機会となった。

講演後のアンケートでは、「タイの医療機関の事情を知る機会がなかったので新鮮であった」、「高齢化社会である日本で起きている問題が海外でも起きていることを知った」、「タイがここまで高齢化への取組みに進んでいる事に驚いた」、「医療の分野においても語学力がなければ大変であること



に改めて考えさせられた」などの回答があり、参加したさまざまな学部の学生にとって新たな発見となる有意義なセミナーとなった。

(2) 国際交流の集い……………

国際交流の集いは、学内の国際交流促進を目的に、外国人留学生と日本人学生、教職員が授業以外の場で一堂に会し、交流を深める機会を持ってもらおうと国際交流センターが毎年2回開催している。

○実施日：平成27年6月17日(水)

夏の国際交流の集いは、留学生38名を含め学生133名、教職員52名、総勢185名が参加し開催された。司会は学生3名により、日本語(施思さん)・中国語(砂川有沙さん)・英語(遠藤彰彦さん)の3ヶ国語で行われた。



開会にあたり、跡見裕学長からの挨拶の後、留学経験者として外国語学部英語学科3年豊田雄太さんと中国語学科3年小林恵さんから留学体験談を紹介した。初めに、カリフォルニア大学アーバイン校へ留学した豊田雄太さんが英語で「留学を通じて自信と知識を身に付け、アメリカ英語からイギリス英語への興味の変化があった」と留学をしたからこそ得られた経験があったと語り掛けた。続いて、北京外国語大学に留学をした小林恵さんが1年間の留学経験について中国語で語り、それを留学生の崔英楠さんが日本語で通訳する形で報告が進められ、「日本には分からない中国社会・人・文化について理解を深める機会となった」と自身を変えたいという想いから挑戦した留学から多くの事を学ぶことができたと話した。

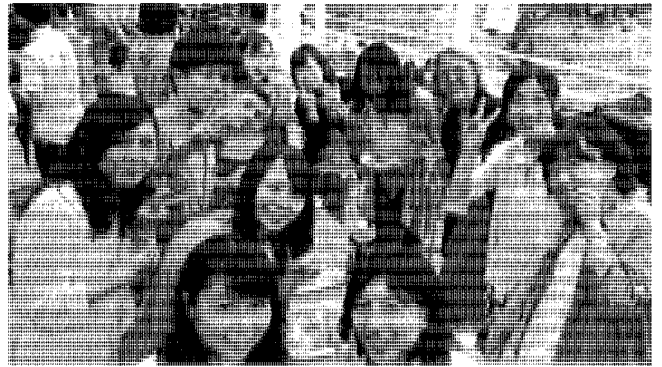
歓談の時間では、参加者が思い思いに交流を深めた後、吹奏楽部による演奏、マジック研究会によるパフォーマンス、国際交流会による日本語・英語でのクイズ大会が行われ、会場は大いに盛り上がった。終盤には、教職員、留学生と日本人学生が外国語を交え楽しく会話をしている姿が見られ、本学の学生とテキサスA&M大学からの学生と一緒に七夕の短冊に願いを書き竹に結ぶなど、終始和やかな雰囲気での交流が行われた。

○実施日：平成27年12月9日(水)

2回目の開催となったこの会はクリスマスに彩られ、留学生23名を含む学生85名、教職員37名の総勢122名が参加し開催された。今回は、中国語学科3年の花田悟さんと陳昊揚さん、英語学科3年の徳永紫音さんの司会により、中国語・日本語・英語の3カ国語で進められた。

跡見裕学長の開会挨拶に続いて、留学経験者より英語学科3年の北野真弓さんと中国語学科の花田悟さんが留学についての発表を行った。ニュージーランドに留学していた北野さんは英語、中国に留学していた花田さんは中国語でのスピーチとなり、花田さんのスピーチでは中国語学科の陳昊揚さんが日本語通訳として参加した。

昨年8月から今年7月までクライストチャーチポ



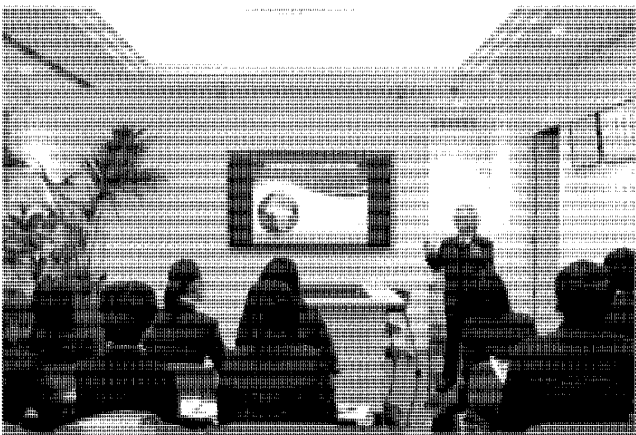
リテクニク工科大学に留学した北野さんはニュージーランドでの経験を、多国籍の学生と共に過ごし現地の自然や異文化に触れ、半年間英語を中心に学んだ後に専門科目の履修により苦労もあったが、苦難を乗り越える力の獲得、人間関係の構築が出来、素晴らしい機会を得られたと述べた。昨年2月から今年7月まで北京第二外国語学院に留学していた花川さんは、留学前は不安であったが中国留学での学習や出会いによって、世界中に友達が出来、言語力向上だけでなく中国語を話すことが好きになり、変えたかった自分に勇気が得られたと述べた。

留学報告の後は歓談の時間が設けられ、その中で学生による様々な催しが行われました。まずは、国際交流会により日本語、英語、中国語3カ国語で『ジングルベル』を参加者全員とともに斉唱し、その後、坂本ゼミより『ドラえもん音頭』の振付の説明が3カ国語で行われ、出席者参加型で盆踊りを行った。最後には、毎年恒例のマジック同好会によるパフォーマンスが行われ、外国語学部長の坂本ロビン先生の挨拶をもって閉会となった。今回で八王子キャンパスでの国際交流の集いは最後となったが、本学の留学生と日本人学生および教職員が楽しく会話する場面が多く見られ、さらに交流を深めることが出来る会となった。

(3) マレーシア大使館および三菱商事MCフォレスト訪問……………

実施日：平成28年2月16日(火)

第4回大使館等訪問ツアーが実施され、本学学生13名および教職員3名、計16名が駐日マレーシア大使館および三菱商事MCフォレストを訪問した。



マレーシア大使館でははじめに、Datin Norfaliza 一等書記官からマレーシアの基本情報として同国の通貨・人種・言語・宗教・気候・政治・経済・観光・文化・建造物等について、更には大使館の役割やマレーシアと日本との2国間関係について説明を受けた。

次に日本の高校生がマレーシアで留学体験を行うマレーシア留学の紹介映像を鑑賞する間、Datin 一等書記官のご厚意により、手作りのロティジャラというマレーシア料理が振る舞われ、参加者全員その美味しさにあっという間に完食した。

最後に、Abdul Ghani 一等書記官より、現マレーシアにおける高等教育について詳しくご説明いただき、高い教育水準を維持するための充実した教育システムについて学ぶことができた。大使館職員の方々によるレクチャー終了後は、今回のマレーシア大使館訪問に向けて行った事前学習を踏まえ、学生達が各自準備してきた思い思いの質問を直接大使館職員の方に聞くお時間をいただき、

交流を深めることができた。

午後は三菱商事MCフォレストを訪問し、はじめに公益社団法人日本マレーシア協会 相談役でもある広島修道大学森嶋名誉教授による日本の国際協力の歴史と現状についてご紹介頂いた。続けて三菱商事株式会社の環境・CSR推進部 社会貢献チーム担当の方からは、三菱商事がNGOやNPO等と取り組む環境問題や社会貢献活動について情報発信する体験型のステーションMCフォレストについてのご紹介、そして日本マレーシア協会と共に行っているマレーシアでの植林活動を含む様々な活動についてお話を伺うことができた。

今回の大使館等訪問ツアーでは、マレーシアについてより理解を深める大変良い機会となり、また、グローバル企業である三菱商事が実施する国際協力について学ぶ有意義な訪問ツアーとなった。

(4) 海外教員の招聘・・・・・・・・・・・・・・・・

招聘教員：北京外国語大学 副教授 徐滔氏

実施期間：平成27年6月8日(月)～6月12日(金)



協定校である北京外国語大学から徐滔准教授を迎え、学生の語学力向上と中国理解の促進を目的に講義をしていただいた。講義では、中国人の視点から見る日本の陽明学、中国語と日本語の音声教育、北京外国語大学における通訳・翻訳プログラムについてや、徐先生ご自身が日本の大学院で過ごされた体験談等についてもお話いただき、学生たちが日中関係をさまざまな側面から考えるきっかけとなった。また、北京外国語大学の留学生受入れ制度や学生生活についてお話いただいたことは、本学の学生にとり、留学について考える良い

機会となった。

最後の授業では、本学の日本人学生および留学生に向けて、ご本人の留学体験をもとに、今こうして一つの教室にさまざまな国からなる学生が共に肩を並べて授業が受けられる環境は決して当たり前のことではなく、少し前までは想像もできなかった事であると述べ、だからこそその環境に感謝し、積極的に交流を持ち、共に充実した学生生活を送ってほしいとのメッセージを送った。

招聘教員：上海外国語大学 副教授 徐旻氏
実施期間：平成27年11月30日(月)～12月4日(金)

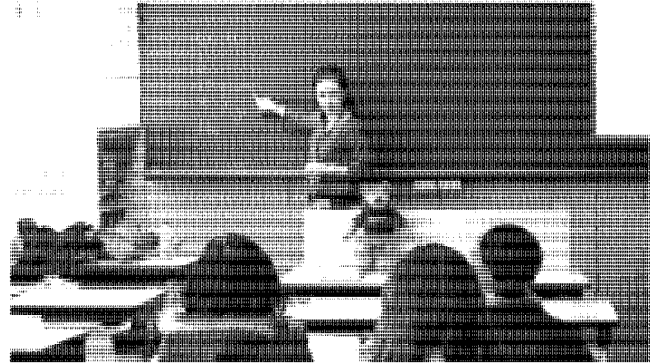


協定校である上海外国語大学から徐旻副教授を迎え、学生の語学力向上と中国理解の促進を目的にご講義いただいた。講義では、「私の好きな日本文学と中国文学」、「中国語と日本語の発音の比較」、「上海外国語大学における留学生への中国語教育について」、「通訳・翻訳に関する中国語の国家資格試験について」等、さまざまなトピックについてお話いただき、中国語を学び始めた1年生には留学について考える動機づけとなり、また、上級生にとっては今までとは違った角度から中国語や文化について学ぶことができる大変貴重な時間となった。

授業以外では上海外国語大学へ留学予定の学生との交流も行い、留学先としての上海や上海外国語大学に関する詳しい情報を話していただき、留

学を控える学生達には大変有意義な時間となった。また、本学の中国語教員や国際交流課員と、中国語教育や学生交換・交流に関する内容など幅広く情報交換、意見交換を行った。

招聘教員：チチェスターカレッジ Juliette Ryan氏
実施期間：平成28年1月6日(水)～9日(土)



協定校であるチチェスターカレッジ(英国)からJuliette Ryan先生を迎え、学生の語学力向上と英国文化・歴史・大学生活等の理解を促進することを目的とし講義をしていただいた。英語学科2年生の授業では、「英国に住んでいる人は？」という問いから授業が始まりました。続けて「イギリス人は？」という問いを投げかけた。そこから“diverse”をキーワードに授業が展開し、イギリスに異なる文化的な背景を持った人たちが集まる理由について、今日ヨーロッパが抱える社会的な問題を様々な観点から丁寧に説明があった。”diversity”の持つ光と影をきちんと理解することが、国際的な視野をもった人になる第一歩であるという講義となった。

外国語学部は「正しい異文化理解に基づく21世紀型世界市民の育成を目指す」ことを教育目標に掲げ、カリキュラム、留学プログラムを展開している。今回のチチェスターカレッジからの教員招聘は、現地の学校の授業を生で体験するだけではなく、教育目標を達成するための重要な役割を果たすものとなった。

(5) 海外大学との学生交流……………

テキサスA&M大学から学生が来訪

実施日：平成26年5月29日(金)



2015年5月27日から8月4日の期間、アメリカのテキサスA&M大学の学生10名と引率教員1名が日本語・日本文化研修「Japan Language & Culture Program」及び英語教育インターンシップを実施するため来日した。

研修初日には坂本外国語学部長を訪問し、学部長が学生に向け「日本文化、日本語を理解する近道は、積極的に日本人と接することであり、是非本学の多くの学生と交流を持ち、留学生生活を充実したものにしてもらいたいと述べました。また、本学学生3名が英語でキャンパス内施設を案内し、初日から学生同士の交流も行われた。

テキサスA&M大学一行は約2か月の間、本学学生との交流、引率教員の授業提供に加え、語学サロン・英語関連授業での英語補助などのインターンシップ、本学の様々な行事への参加を行った

外国語学部生と交流 香港科技大学生が来校

実施日：平成27年1月21日(木)

アジアの大学ランキングトップレベルにある香港科技大学の学生たちの一行14名が、1月21日午後、数日前に降った雪の残る本学八王子キャンパ

スを訪れ、武道系のクラブ活動を見学したり外国語学部生と意見交換を行った。

香港科技大学は、香港・新界に本部を置く1991年開設の公立大学で、人文社会科学系を含めた5つの学部があり、英エコノミスト誌の大学ランキングではアジアのトップ10内にあり、ビジネススクールとしてはアジアトップとして知られている。

今回の訪問は、同大学の訪日中の研修の一環として、公益財団法人東京観光財団からの紹介・依頼により行われたもので、この日午後、リーダー研修の学生たちの一行14名が八王子キャンパスを訪れた。本学側は外国語学部が受け入れ窓口となり、全体のコーディネートは、野口洋平准教授(観光学、ホスピタリティ・マネジメント研究)が担当した。一行が到着すると、宮首弘子(張弘)准教授(日中通訳学・翻訳学、中国語教育研究)による歓迎の挨拶のあと、中国語学科の学生が中国語で大学紹介を行った。

その後、日本の武道を知りたいという事前の要望を受けて、弓道部の練習風景を見学し、武道特有の張りつめた雰囲気を感じた。さらに、剣道部の見学では、実際に竹刀を持って打ち込みの方法を教わったりしたほか、部員による本番さながらの練習試合の見学を行った。

最後に、中国語学科の学生20名との交流会が行われ、香港科技大学による大学紹介のあと、英語や中国語で互いに自己紹介をしたり、それぞれの学生生活を語り合ったりして交流を深めることができた。

一行は「日本の大学生との交流に加え、武道や雪景色も見ることができ、貴重な体験となった」などと感謝の言葉を述べ、夕方、八王子キャンパスをあとにした。外国語学部の学生達にとっては、英語や中国語を実践的に使う絶好の機会となった。

(6) 企業が求めるグローバル人材像について伺う懇談会を開催……………

12月7日(月)、昨年度に引き続き、第2回「企業が求めるグローバル人材像」について伺う懇談会を新宿の京王プラザホテルにおいて開催した。

この懇談会は、海外への事業展開を行っているグローバル企業5社から、自社のグローバル人材育成の実態、求めるグローバル要素、グローバル人材を育成するための社内教育等についてお話を伺いし、本学での教育事業に反映させることを目的に開催された。

はじめに、跡見学長より開催の趣旨説明があり、続いて各社の人事担当者から、自社の状況と取り組みについて夫々説明があった。グローバル人材に求められるものとして全ての企業に共通していることは、語学力が高いだけでなく、海外と対等に渡り合うことのできるリーダーシップ、コミュニケーション能力とタフな交渉能力等が不可欠としている点である。それに加え、海外現地スタッフと円滑に物事を進めるにあたり、人の模範となり得る、人の信頼を得られる等の「人間性」もグローバル人材として大切な資質の一つだという意見も聞くことができました。また、語学力養成の取り組みとして、海外支社等での研修、語学試験の導入を積極的に行っている企業がほとんどであることが分かった。

懇談会後半での意見交換は大変参考となるもので、企業からの要望、意見等を聴取する機会を定

期的に設け、それらを本学の人材育成プログラムに反映させていく。

懇談会に参加いただいた企業

- ① 三井住友海上火災保険(損害保険)
- ② 日本航空(空輸)
- ③ 京王プラザホテル(ホテル)
- ④ ルネサスイーストン(半導体商社)
- ⑤ スリーポンド(製造)

(7) 事業成果としての卒業後の進路(グローバル企業への就職状況)……………

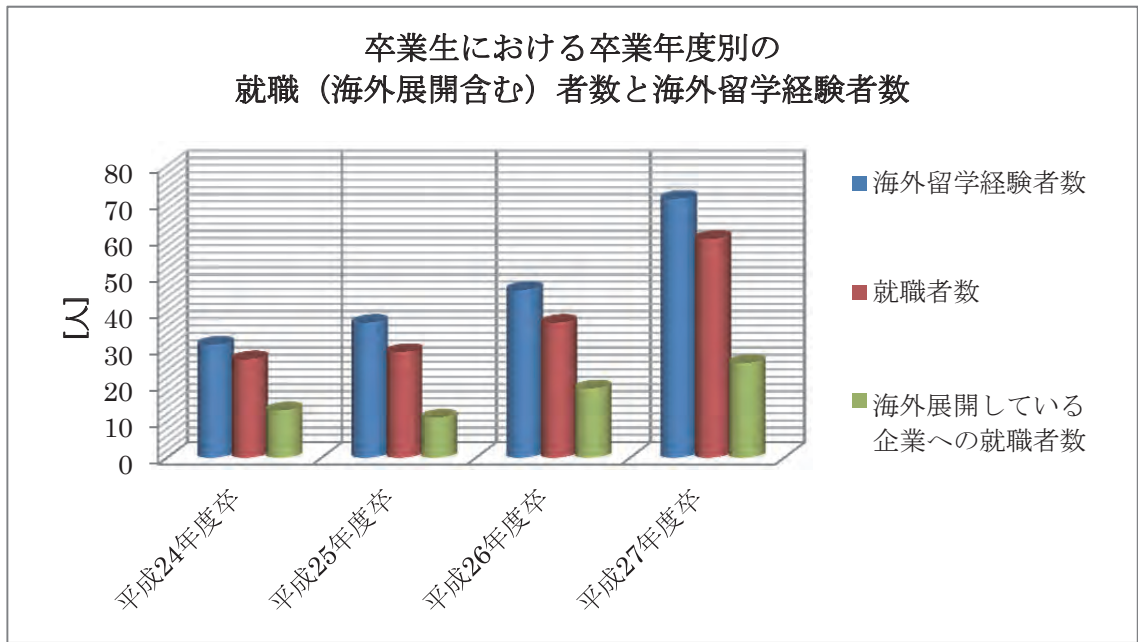
本事業のアウトカムとして「海外留学経験者のグローバル企業への就職状況」を検証しているが、本事業の開始に伴い、海外留学を経験した外国語学部生が、グローバル企業1)に就職した学生の数は増加していることが認められる。

平成27年度卒業生のうち、在学中に3ヶ月以上の海外留学を経験した者が就職した60社のうち海外展開している就職先は半数以上の26社に登り、その割合は43%であった。

就職先の業種では旅行、ホテル、運輸、サービス、商社などに加えて、東南アジアを中心にグローバル展開をしている小売や製造、外食などが多いのが特徴となっている。



図 4. 海外留学経験者のグローバル企業への就職状況(平成23年度～27年度)

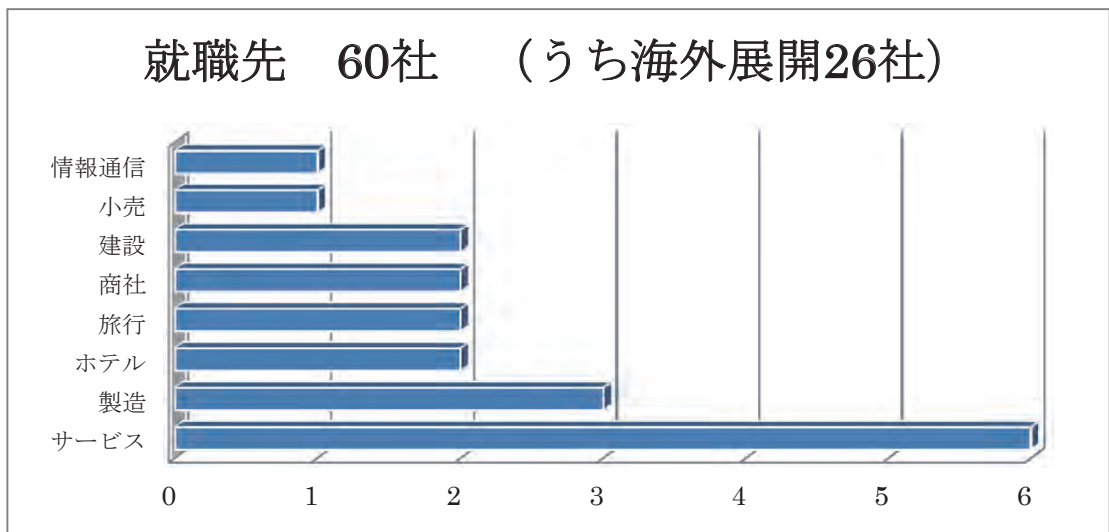


1) グローバル企業は海外事業所（子会社含む）を持っている企業のほか、訪日客に対応するために外国語を使うケースが多い企業とした。

また、平成27年度卒業生における海外留学経験者での就職者数は71人であった。この就職先60社のうち、海外展開している就職先26社の業種は図4の通りである。

海外展開している就職先の業種も同様に多様化し、旅行・商社・製造・建設業などの世界情勢の変動とともに注目されている分野が増加した。

図 5. 海外展開している就職先26社の業種





8. 大学のグローバル化、教育の質保証の推進体制の確立



(1) セメスター制度による海外大学等との留学交流の促進……………

教育課程の国際通用性向上のための取り組みとして、本事業を推進している外国語学部及び総合政策学部ではセメスター制を導入し、「興味関心・能力に合わせた積上型学習」、「海外留学・研修の機会拡大」が実現している。また、交換留学や相互留学派遣においても、留学プログラムの開始時期が春・秋の2回設定されており、学生の学修計画に沿った半年・1年の留学が可能となっている。

(2) 単位認定を伴う海外研修・留学の推進……………

大学が認めた海外研修・留学は、そのすべてが単位認定の対象となっている。よって、半年・1年の海外留学に参加した学生も留学期間中の学習成果を単位認定することにより、4年間で卒業できる教育システムが構築されている。

(3) GPA制度……………

平成25年度から導入されたGPAによる成績評価制度により「単位認定の質保証」「学修指導(アカデミックアドバイス)への活用」「交換留学相互受入基準の明確化」がより一層実現された。平成27年度より新たにアカデミックアドバイザー制度を運用し、GPAによる履修指導を強化した。GPAの低い学生に対しては、アカデミックアドバイザーの指導が済むまで履修登録をさせないなどのルールを策定し、より教育の質保証を担保する目安になっている。

(4) カリキュラムのコース・ナンバリング……………

平成24年度に導入したコース・ナンバリング制を精査し、カリキュラムポリシーやカリキュラムマップに基づき、国際標準に準じた科目のナンバリングの整理を行っている。

グローバル人材育成のための体系的カリキュラム整備を実施することで教育課程のさらなる国際化を進めている。

(5) 教員のグローバル化、全学FD……………

平成26年度に引き続き、オーストラリアクイーンズランド大学のCLIL (Content and Language Integrated Learning: 専門科目・言語統合型学習) プログラムに教員2名を派遣した。CLILプログラムは、教養・専門科目を英語で運営する教授法について訓練を受ける機会である。グローバル人材育成に資するより一層の授業改善を行う上で、重要なFD活動の一つとなった。

学内においては、平成27年6月に北京外国語大学の徐滔副教授を、11月には上海外国語大学の徐旻副教授を招聘し、中国語学科所属教員と教授法等についての意見交換を行った。平成28年1月にはChichester CollegeのJuliette Ryan氏を招聘し、教員との教育交流(FDを含む)を行った。また、語学サロンを教員にも開放することで、語学力の向上を図った。

(6) 事務職員のグローバル化……………

教育課程の運営を支援する事務組織のグローバル化のため、グローバル専門事務職員を継続雇用し、事業推進の加速化を図った。またグローバルSD「職員が拓く大学の未来～グローバル社会に支持され続ける大学を目指して～」(全職員対象)を開催し、大学職員の果たすべき役割について認識を深めた。今後も継続してSDを実施し、全職員のグローバル意識を高めていく必要がある。

また、職員においても語学サロンの受講やe-learningの利用を積極的に推進するとともに、NAFSA年次大会に職員を派遣し、世界各地の大学関係者と情報交換をすることなどにより、グロー

バル化への意識の向上を推進した。

(7) 資料等の多言語化……………

海外大学との教育課程や科目内容等の摺合せをするため、カリキュラムの多言語版の作成をしているが、2016年度から4学部のカリキュラムが改正されるため、全学部の新カリキュラムの多言語化(改訂版)の作成を進めている。

また、外国語学部をはじめとする八王子に設置されている3学部・2研究科を井の頭キャンパスに移転することに伴い、本学を訪れる外国人来訪者のための情報資料として井の頭キャンパス紹介パンフレットの英語版を作成した。

(8) グローバルシンポジウムの開催……………

第6回グローバルシンポジウム

「海外留学の促進と成果～大学のグローバル化における杏林大学の実績と展望～」

日 時：2015年10月17日(土) 13:00～16:00

場 所：杏林大学八王子キャンパス D棟108教室

参加者：163名

第一部 学生による留学報告(プログラム終了プレゼンテーション)

- 1. 英語圏留学 : 3組
- 2. 中国語圏留学 : 4組

第二部 学生による留学報告

- 1. 医学部(海外におけるクリニカル・クラークシップ)
- 2. 保健学部(海外研修)
- 3. 総合政策学部(海外ゼミ合宿等)

第三部 講評・総括：第三者評価委員より

第1部の外国語学部生による報告では、それぞれの留学先で学んだ言語(英語または中国語)で、留学先の授業報告、留学経験などを発表した。

英語圏留学生からは、国際色豊かな友人たちと共に学んだ経験から、積極的な友人たちに交じり、日本にいる時には想像できないくらい積極的に発言をする等、スポーツやアクティビティーを

通じて英語のみならずコミュニケーション能力が向上したことを実感したことが報告された。また、留学での学生生活やホストファミリーとの生活を通じて留学当初感じたカルチャーショックや不安を乗り越え、他国の文化・習慣・考え方などを理解し、受入れる事で本当の家族や友人と呼べる関係が気付けたことがかけがえのない経験となったと伝えた。TOEICスコアの上昇や、総合的な英語力の向上を実感したという報告の中で、今後留学を考えている学生へのアドバイスとして、自分の留学目標は何かを明確にし、失敗を恐れずに強い精神力を持って臨めば、必ず成果と呼べる貴重な経験が得られるので、ぜひそのような気持ちで留学にチャレンジしてほしいと伝えた。

中国語圏留学生からは、留学先の大学での学びや留学生同士の交流、現地での生活の様子についての報告があった。日本人は漢字を使用するため、読み書きの授業については比較的簡単に感じたが、話す、聞く授業には困難した、留学生のクラスメイトの中でもアジア人は発言が少なく比較的消極的であったが、他の国のクラスメイトは積極的に発言し、そのような学習態度がうらやましかったなど様々な国の学生と共に学び、刺激的に留学生生活を過ごしたことが報告された。また、大学内で行われたイベントでは、日本の料理や日本の舞踊を披露するなど生き生きと日本の文化を紹介したことを伝えた。終わりには塚本国際交流センター長より発表に関した内容について中国語での質問があったが、「中国人と区別がつかないほどの語学力」であるとの言葉通りの応答力だった。

第2部は、スノードン副学長の進行により、医学部・保健学部・総合政策学部の学生による海外研修の報告をした。

医学部からは6年生が、海外におけるクリニカル・クラークシップとして病院実習を行い、アメリカと日本の医療環境の違いと留学の経験を今後どのように活かしていきたいかについて報告した。海外へ留学してよかったと思うことは、アメリカ

医療の良い点を理解した上、日本の医療の良い点を見つめ直すことができたことにある。両国の良いところを自身の中で吸収し、これからの医師人生につなげていきたいとの報告があった。

保健学部からは看護の見地から、日本では自分で病院を選択できるが、イギリスはNational Health Serviceという無料で提供される医療制度において、かかりつけ医を受診する(緊急時を除いて)という、それぞれの国が提供する医療のスタイルの違いを英語で報告した。

総合政策学部からは、海外ゼミ合宿として経済や政治について学んだことを現地で実際に体験したり、現地の人との交流を深めた海外研修の重要性を発表した。短期間の研修であったが、現地で交流した南台科技大学の学生が翌月に来日した際、今度は東京で本学学生が観光案内をするなど、プログラム終了後の現在も交流が継続していることが報告された。

第3部は、講評・総括として第3者評価委員の2名、横河電機株式会社社友の内山勲委員、およびテンプル大学ジャパンキャンパス学長ブルースストロナク委員により講評・総括をいただいた。評価委員からは「学部の違いにより、海外留学・研修の目的や学生の得るところもさまざまであるところが興味深かった。留学を通して学生が大きく成長している様子がうかがえる。今後もこのような会を開催して後輩が先輩の話聞く機会を続けてほしい。」と高い評価をいただいた。また「経験がすべての基礎になる」との話から、「全員が海外留学・研修を経験すべき」とのメッセージをいただいた。

本学のグローバル人材育成支援事業で上げている「卓抜した語学力(日中英トライリンガル)」と「スマートでタフな交渉能力」について、海外留学から成果を確認できる有意義なシンポジウムとなった。

(9) グローバルセミナー FD/SD ……………

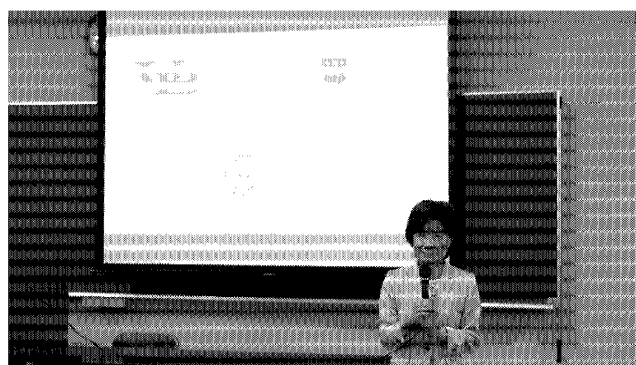
第13回グローバルセミナー「米国大学 留学生獲得・選考・エンロールメント・マネジメントに関する先進事例研修報告(FDSD)」

実施日：平成27年6月3(水)

報告者：外国語学部 黒田有子教授

場 所：八王子キャンパスD棟301教室

参加者：教職員合計53名



この先進事例研修は、State University of New York at Buffalo、Fordham University、New York University、WES (World Education Services) にて3月に実施された。世界標準の留学生獲得アプローチを理解することにより、日本の大学の留学生獲得に係る現状と課題に気づき、今後夫々の大学で、あるいは日本全体でどのように対応していくのかを考えていくことを目的としており、国内他大学の教職員を始め大学評価機関や県庁職員等が参加した。

今回のセミナーでは、研修の概要とともに、効果的な留学生募集をおこなうための秘訣や国際的な入学生選抜の現状や方法、認証評価の重要性、国内外大学の取組みなどが多岐にわたり報告され、非常に中身の濃いセミナーとなった。

黒田教授は「大学が国際化するという事は必ずしも“英語化”だけではない。今回の研修では、国際化に向けた大学側の覚悟を問われている気がした。たとえばハンディキャップをもっていたり、経済的に厳しい状況にある優秀な学生がいた場合、その学生をいかにサポートできるか、ということと同じく、様々な国籍をもつ優秀な学生を受

け入れる努力をする事で大学に多様性が担保され、日本人学生にとっても価値ある環境を生み出せるのではないかとし、併せて「但し、他大学の真似をするのではなく、本学ができることを本学らしく着実にこなっていくことが重要」と述べた。

第14回グローバルセミナー「CLIL(Content and Language Integrated Learning) 参加報告(FD)」

実施日：平成27年6月24日(水)

報告者：外国語学部 岩本和良准教授
保健学部 一場友実講師
医学部 平井和之講師

場 所：八王子キャンパスD棟301教室(三鷹キャンパス本部棟3階会議室と同時中継)

参加者：教職員合計34名



今回のセミナーでは、CLIL研修の概要をはじめ、各所属学部における応用の可能性について報告がなされた。3名の先生方は、今回の研修は大変貴重な経験であり、また教授法を見直す良い機会であったと述べるとともに、実際にCLILを導入することの難しさや課題についても触れた。そのなかで何ができるかというひとつのアイデアとして、「CLILには教育効果を引き出すための具体的な教育技法が体系化されているので、まずは日本語で取り入れてみる」との案も出た。またセミナーの参加者からは「現在行っている授業の一部を英語を用いてCLILで行う」、「特別セミナーとして実施する」などの意見もあった。

最後にコーディネーターのスノードン副学長からは、海外留学の更なる促進として、本学には英語による開講科目を増やすという目標がある。諸外国大学教員と共にアクティブラーニング形式で学べるCLIL研修は先生方にとって大変有意義な内容であるため、今後もぜひ継続していきたいと述べた。

第16回グローバルセミナー「CLIL研修参加報告会(FD)」

実施日：平成27年12月17日(木)

報告者：外国語学部 小林輝美講師
保健学部 坂本岳士助教

場 所：八王子キャンパス D棟302教室

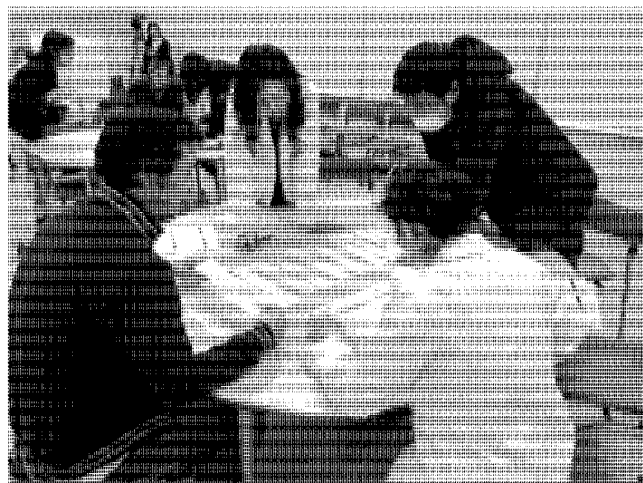
参加者：教員11名



今年8月にCLIL研修に参加した外国語学部 小林輝美講師、保健学部 坂本岳士助教より、セミナー参加者を対象に各先生方が本学で担当されている専門科目の授業を一部CLIL教授法を用いて、模擬授業を行う実践形式の報告会となった。小林先生による「プレゼンテーション」について学ぶ授業、そして坂本先生による「X線画像」の授業をそれぞれ、通常の講義形式とは異なる英語を用いたアクティビティーやスライドを活用し、セミナー参加者による活動的なグループワークが行われた。

小林先生と坂本先生は最後に、今までの授業形態とCLIL教授法を用いた授業との違いについて

や、CLIL教授法のメリット及びデメリット、実際の授業に取り入れる為の課題などについて見解を述べた。FDに参加した先生方によるアンケートでは「アクティブラーニングの実体験は教員にとって有意義だと思った」、「模擬授業の形式でのFDで大変分かりやすかった」、「英語による授業は適度な緊張感の中、楽しく学習できることが分かった」等、アクティブラーニングそしてCLIL教授法に関する前向きなコメントが多く寄せられ、本学における全学的なアクティブラーニング実施に向けて、大変良い機会となった。



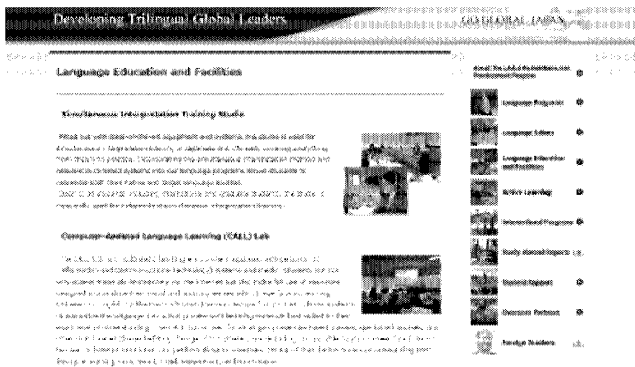


9. 事業の経過・成果等の対外広報の展開



(1) 大学HPにグローバル事業特設サイトを構築し運営

本事業に係る概要や実績・進捗状況等を、国内外の大学、社会や高校生等を対象に広く発信することにより、本事業の今後の展開及び学生の海外留学の促進に資するため、ウェブサイトの再構築を行った。併せて海外に発信するための英語版ホームページの運営や、学生への情報伝達に配慮したスマートフォン版ホームページの運営等も積極的に進め、タイムリーに情報を発信しながら留学経験者・希望者の交流ネットワーク構築を目指し、より一層の情報発信体制が整備された。



特設サイト：<http://www.kyorin-u.ac.jp/univ/feature/global/>

(2) 学内サイトの立ち上げ

昨年度から引き続き、学内サイト「あんずNet」において、国際交流課のサイトを運用し、本学教職員にむけて事業の進捗状況を随時発信した。海外出張報告書、本学国際交流委員会および本事業推進委員会の議事録等を随時アップロードし、情報共有のツールとして活用されている。

(3) プレスリリース・サービスの利用

本事業に係る概要や実績やイベントの開催案内等を、国内外の大学関係者、マスコミ関係者および一般ユーザーの方々を含め、1,725の機関に配信し、年間で11000PV以上のユーザーに閲覧、

引用されるなど、本事業の今後の展開及び学生の海外留学の促進の取り組みを発信した。

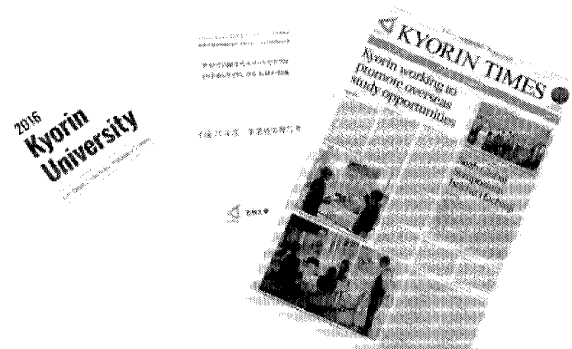
(4) 本事業紹介パンフレットの作成

産業界、受験生(保護者を含む)、高等学校教員に向けて、事業採択からこれまでの取り組み・実績を外部に広く発信するため、英字新聞『Kyorin Times vol.3』と井の頭キャンパス移転の早わかりガイドブックの英語版を作成し、海外からの訪問客、海外出張の際の訪問先機関および本学在校生に配布した。

『経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援平成26年度 事業成果報告書』(日本語)

『Your Quick Guide to the Inokashira Campus』(英語)

『Kyorin Times vol.3』(英語)



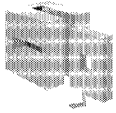
(5) シンポジウムの開催告知

シンポジウム開催前には、本学の取り組みを社会に広く発信するため、大学・高校・企業等に向けてフライヤー送付による開催告知を行った。また、新聞紙上でも開催告知を行い、産業界・経済団体・自治体・高校生を含む高等学校関係者等からの参加者も得ており、グローバル人材育成における産官学の有機的連携を図るきっかけとなった。

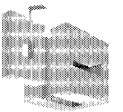
(6) 学内行事での広報活動……………

7月および8月に開催された学内行事であるオープンキャンパスと、10月に開催された学園祭で、

留学紹介コーナーおよび相談コーナーを設置し、在学生、受験生(保護者を含む)、高等学校教員等に本学の取り組みと実績等を広報した。



10. キャンパス移転とグローバル化の促進



本学園創立50周年を迎える平成28年に「井の頭キャンパス」(東京都三鷹市下連雀5丁目4番1号)を開設し、現在八王子に設置されている外国語学部をはじめとする3学部2研究科を移転する。これにより、杏林大学が設置するすべての教育研究施設が、医学部等のある三鷹市に集まることになる。

本学では、これを契機に本補助事業で整備した教育環境・機能や人材育成成果のすべてを集約・発展させ、本事業の構想調書及び中間評価における留意事項や参考意見に基づく本事業の推進と、全学的なグローバル教育を展開するとともに、高大接続や大学間連携、地域連携事業等を通して、広く社会に貢献していくことが方針として確認されている。

(1) 施設の移設・集約……………

本事業を推進するための国際交流センター及び国際交流課、語学教育を支援する中国語サロン・英語サロン、同時通訳演習室及び留学生や日本人学生が集い交流する交流プラザ、海外ニュース(CCTV、CNN、BBC)を視聴するTV等を井の頭キャンパスF棟2階に集約して配置される。その他、CALL(Computer Assisted Language Learning)教室やライティングセンターも同じフロアに設置されることで、学生の学習環境は格段に合理化される。

(2) グローバル人材育成事業の継続・発展……………

グローバル関連施設や機能が集約されたことにより、学生は留学情報、語学学習にアクセスしやすくなり、医学部を含む全学部の学生が語学サロン等の施設を利用可能となる。また国際交流センターでは留学相談コーナーを充実させ、留学情報の提供やサポートを行う。



11. 平成28年度事業計画



- (1) 平成27年度の実績報告を取り纏め、点検・改善を加え、平成28年度の事業展開を推進する。
- プログラム推進委員会(毎月開催)で、平成27年度の事業報告を取り纏め、自己点検する。さらに、平成26年度に実施された中間評価結果及び平成27年度の第三者(外部)評価機関からの評価・助言をもとに、平成28年度事業の改善・展開を推進する。
 - 本事業を継続推進するためのグローバル専門職員を雇用する。(継続)
- (2) ネイティブ語学教員の雇用(継続)、語学サロン運営のための留学生チューター雇用、独自教材の改良等により外国語力の強化を図る。
- 語学教育を強化するため、独自教材(CIC、PEP、同時通訳等)の改良・開発を進める。
 - 中国語・英語サロン、e-ラーニング語学学習システムの活用を、正課授業(の評価)と連動させることを強化し、学習効果を高めていく。また海外TVニュース番組(中国語・英語)が常時視聴できる環境を維持する。
 - 語学検定試験により語学教育・学習の成果を測定・分析し、語学クラス分け及び今後の語学教育の改善に資する。
 - 教員の語学教育スキルの向上を図るため、中国語圏・英語圏の大学での研修に参加する。
- (3) アクティブラーニング型の教育(PBL形式のディベートシミュレーション、ケーススタディ演習等)を実施する。
- PBL(課題設定・解決型学習)や少人数クラスによるアクティブラーニングの実施について、本学の第三次中期計画・教育開発部会と連動し、これまでの取組を点検・改善案策定の上、「スマートでタフな交渉能力」涵養を旨とし継続的に実施していく。
- (4) 「卓抜した語学力」「スマートでタフな交渉能力」の測定・評価方法の確立・運用を進める。
- 語学検定試験を活用した「卓抜した語学力」測定に加え、「スマートでタフな交渉能力」の測定・評価方法(ルーブリック・ポートフォリオ)を活用した「グローバル人材育成」の測定・検証を行い、その成果を学内外に公表する。
 - プログラム修了プレゼンテーション、卒業研究報告会を開催し、外部評価委員を含めた評価を行う。
- (5) グローバル理解を深めるため、グローバルセミナーやシンポジウム、大使館訪問・交流を実施し、本事業の深化を図る。
- グローバルセミナーは、国内外の有識者や、グローバル産業界で活躍している方(卒業生を含む)を講師として招聘し、主に学生・教職員を対象に開催する。(年4回開催)
 - グローバルシンポジウムは、産官学の有機的連携により、国内外の有識者による講演のほか、本学教員・学生を含むパネルディスカッション等を行い、学生のキャリアデザイン構築に資する。
 - 中国語圏又は英語圏の大使館等を訪問し、各国の事情(経済・産業、歴史・文化、日本との関係等)について理解を深める。
- (6) 海外協定校及び留学プログラムの拡大・充実、海外インターンシップの推進を図る。
- 中国語圏及び英語圏の大学とのさらなる協定拡大を図るとともに、留学プログラム(インターンシップを含む)を開発し、学生に提供する。
 - 海外大学の学生とのゼミ交流(PBL型プロジェクト演習等)を企画し、実施する。
 - 安心・安全な海外留学・研修を提供するため、留学中の危機管理の一環として「留学危機管理オリエンテーション」を実施するほか、

『留学(危機管理)ハンドブック』の改訂版を制作・配布する。

○グローバルポートフォリオを活用し、学生の留学中レポートを時系列に沿ってファイリングすることで、学生が振り返りの資料として活用する。

(7)大学のグローバル化、教育の質保証の推進体制を確立する。

○学内情報の多言語化や、FDやSD等により教職員のグローバル化を推進するほか、教職員の語学力向上を図る。

○海外協定校等から教員を招聘し、教育方法等に関する交流を図るとともに、本学での授業を担当していただく。

○GPAの活用や科目ナンバリングの整備等により、「単位認定の質保証」また学修指導へ活用を推進する。

○シラバスの整備や学習ポートフォリオ等の活用により、学生の学修時間確保を推進する。

(8)本事業(留学促進、語学強化、シンポジウム等)の成果の对外広報の展開

○本事業のポータルサイトをさらに充実させるとともに、定期的な情報の更新を行う。

○本事業による留学実績、語学強化等の進捗及び成果を広報・発信するため、ニュースレターを作成し配信する。

○新聞等のマスメディアによる広報・広告を実

施する。

○GGJ-Expoなど国際化拠点事業採択他大学との情報交換、情報発信の場を活用する。

(9)本プログラムで育成した学生の就職の支援・促進

○授業配信システムにより、海外留学中の学生に、学内での授業「キャリア指導」等を配信する。(継続)

○キャリアサポートセンター(就職支援部門)と連携し、本プログラムで育成した学生の就職を促進するとともに、就職状況及び就職後実態について調査・検証する。

○グローバル企業との意見交換会を実施し、グローバル人材の育成と本事業で学んだ学生の就職支援をより一層加速させる。

(10)日本発信プロジェクト事業(日本文化発信・日本語学習支援)を継続・展開する。(ニュージーランド、アメリカ、中国等)

(11)八王子キャンパス(外国語学部等が所在)が平成28年に井の頭キャンパス(三鷹市)に移転することに伴い、本事業に係る施設・設備を含む機能全般を遺漏なく継続稼働し、更に事業推進のための諸環境の整備を図る。

(12)補助期間終了後の事業継続に向け、平成29年度以降の事業計画・目標及び資金計画を策定する。

スーパーグローバル大学等事業
杏林大学「経済社会の発展を牽引するグローバル人材支援」
平成27年度 GGJ 事業に係る第三者評価会 報告書

I 第三者評価会議の開催概要

1. 日 時 平成 28 年 8 月 26 日（金） 14 時～16 時
2. 場 所 杏林大学井の頭キャンパス C（本部）棟 5 階 応接室
3. 第三者評価委員（敬称略）
内田 勲（横河電機株式会社 社友）
ブルース ストロナク（テンプル大学ジャパンキャンパス 学長）
木村 英樹（追手門学院大学 教授）
4. 杏林大学側出席者
松田剛明 副理事長、跡見裕 学長（事業構想責任者）、ポールスノードン 副学長（国際交流担当）、塚本慶一 国際交流センター長（事業実施責任者）、坂本ロビン 外国語学部長（事業対象学部長）、塚本悌三郎 国際交流課調査役（事業事務責任者）
5. 評価のための参照資料
(1) 昨年の第三者評価（助言等）に対する対応状況
(2) 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援平成 27 年度事業成果報告書
(3) 平成 28 年度フォローアップ調査票
(4) 杏林大学のグローバル化の方針
(5) “Kyorin Times”（英字新聞）
(6) その他関連資料

II 第三者評価報告書

平成 27 年度事業報告及び昨年度実施された中間評価の結果をもとに、第三者評価委員（学外有識者 3 名）から、事業成果に対する評価及び今後の本事業の取組に対する意見・助言を受けた。

1. 事業目標の達成について

【委員】 フォローアップ調査票で、平成 27 年度の外国語スタンダードの達成目標が 30 人であるの対し達成者が 26 人、海外留学経験者数が 97 人に対して 81 人となっているが、それらは結果が出る前に状況が分からなかったのか。目標を立てたら達成しなければならない。目標達成できていないこういう値を「結果」として出してはいけないし、そもそも目標設定が甘いのではないか。目標を達成するためにどうするのか、学生に何をさせるのか等具体的な方策を示さなければならない。是非、学生一人一人の具体的なフォローアップをしていただきたい。

また事業最終年度に入り、具体的に出口を考えなければならない。最終的な評価は数字で見られることになる。目標を達成できる見込みと目標達成のための具体的な策を講じていく必要がある。

2. 中国語教育について

【委員】 中国語学科の教育方法で 1 年次に 300 時間の集中プログラムを実施していることは評価できる。中国語教育を取止める大学が多い中、杏林大学が中国語教育に力を入れていることは評価し

ており、是非継続をしてほしい。なお、「交渉力」とは話すことだけでなく、「書く・読む」力も重要である。3年次・4年次では、その教育にも注力してほしい。

3. スマートでタフな交渉能力の評価の定義について

【委員】 スマートでタフな交渉能力の評価の定義として「異文化理解とグローバル的視野」という項目があるが、自他の文化を理解することで、異文化理解を深めることになるが、日本文化を理解する教育、評価は行っているか。またどのように養っているか。

(杏林大学) グローバルループリックには「日本の歴史、文化、習慣、社会情勢に関する知識と理解」や「日本の良さを認識し、それを外国人にも伝えることができる」という評価の指標を含めている。また、新カリキュラムにおいては、日本の文化を理解する授業を設け教育している。

4. インターンシップについて

【委員】 海外におけるインターンシップを28日間実施したことは評価できるが、他のインターンシップの多くは2週間程度である。長期間のインターンシップ実施に取り組んでいただきたい。

5. アカデミックアドバイザー制度について

【委員】 外国語学部で導入しているアカデミックアドバイザーについて、教員がアドバイザーを兼ねているとのことだが、教員の訓練は行っているのか。アカデミックアドバイザーは極めて重要であり、本来は事務職員である専門スタッフが行うべきものである。特にディグリーパスの中での留学に関するアドバイザーも極めて重要である。大学のため、専任のアカデミックアドバイザーを設置することを奨める。

6. 海外協定校の拡大について

【委員】 海外の大学52校と協定を結んでいるが全ての協定校と協定内容が稼働しているのか。またこれからも協定校を増やす計画か。

(杏林大学) この事業の目標値海外協定校50校を達成できたので、今後積極的に増やす予定はなく、新たに開発した大学とのプログラムを促進していく方針である。

7. 海外からの留学生の受け入れについて

【委員】 留学生の受け入れについて、目標値と達成値が乖離しすぎている。杏林大学に魅力がなければ留学生はやってこないのだから、杏林大学に留学したら何を学べるかを明示し、学生の質を落とすことなく留学生を確保する策を模索してほしい。留学生受入れのため英語での授業やディプロマプログラムを提供している大学が増えているが、日本への留学のメリットを考えると、やはり日本語教育、日本語で教えることを考えるべきだと思う。また日本に留学していた学生が帰国後母国の社会で活躍することで、その大学の大きな発信源となっている。

(杏林大学) 杏林大学では数年前に留学生の「数より質」を選択したため、留学生数は減少しているが、現在特に中国から来ている留学生の質はかなり高く、杏林大学の学生にとっても良い刺激となっている。更に今後、学部課程留学を中心に留学生の確保を進めるにあたり、今年の3月に上海の高校を訪問し、優秀な海外の高校生の確保に向けた動きを開始している。また評価委員の助言もあり、この度英国に海外拠点を開設した。今後は中国にも拠点を設け、杏林大学の広報活動を展開し、海外からの優秀な学生の呼び込みに取り組んでいきたい。

8. 留学生の日本での就職について

【委員】 受け入れた留学生はどれくらい日本で就職したのか。真のグローバル化を図るためには、日本の学生を海外に送り出すだけでなく、留学生を日本で就職させることも必要である。個人的な意見であるが、将来の日本の労働人口の問題を考えると、外国人留学生を日本で就職させることを考えることが大事である。

(杏林大学) 詳細データは分析していないが、日本国内での就職率も高まっており、大学院への進学を目指すものも出てきている。帰国後、日系企業に就職しているものも多い。

9. 戦略的な情報発信について

【委員】 キャンパスを移転しそれなりの効果を狙っていると思うが、外部の人にとっては杏林大学が何をやっているかわかりづらく、まだまだ広報活動が不足している。杏林大学が行っている様々な取り組みをわかりやすく外部に発信する必要がある。

杏林大学は様々なことに取り組んでいるが、より杏林大学ならではの「売り」の発信が国内外から学生を集めるために重要である。学内の取組みを海外発信することを意識的に行った方がよい。

グローバル人材育成事業成果報告書はあいまいな表現が多く具体的でなく評価しづらい。これまで取り組んできた事業ごとにその成果を明確に A4 用紙 3 枚程度に学部編成時、本プロジェクト開始時点及び現在など時系列に、教育課程、語学力、グローバル教育力、語学サロン利用者等、それぞれの取組項目ごとにグラフやチャートでまとめ、事業終了後の事業計画についても A4 用紙 1 枚程度で作成する等、文字で表記するのではなく成果をわかりやすく可視化し、国内外に発信することが急務である。また、オールジャパンでの全学共通ルーブリックを実現したいのであれば、それも末尾でいいから添付して文部科学省に提案すべきである。

10. 事業の継続について

【委員】 本補助事業終了後、次はどうするのか。日本の大学がグローバル化をしていくためには、グローバルプログラムを作ることだけではなくて、一番大事なのはアカデミックオリティを上げることにある。そのためにアカデミックアドバイザーや、留学アドバイザー、ライブラリアンなどのプロフェッショナルスタッフも必要になる。杏林大学が文部科学省の補助事業終了後もグローバル事業を継続していくならば、事業で培ったものを活用しアカデミックオリティを上げていくことを望む。

以上

文部科学省 補助事業 GGJ (Go Global Japan)

経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援

平成27年度事業成果報告書



杏林大学 国際交流センター

三鷹キャンパス 〒181-8611 東京都三鷹市新川6-20-2
井の頭キャンパス 〒181-8612 東京都三鷹市下連雀5-4-1